

KAODAI KYO NO REKISHI GUEN GOKU HOA

カオダイ教の歴史（二） グエン・ゴク・ホア

はじめに

人類文化史を遡つてゆくとき、宗教として形をとる以前から、すでに人類には「信仰」という内的な力があつたと思われます。人々は、野生の動物達と同じよう、自然の中でも生活したが、その「信仰」の力が、人間と動物の相違点であり、その「信仰」の力によつて、その後の人類文明も築かれてきました。

遊牧狩猟の生活から、土地に定着し集落を形成し、村・町・地域社会・國家・国際連邦などと、意識も広がつてきたわけですが、いまや「世界大同」に向かつて、さらに進展してゆくでしょうし、その進展の一一番の原動力として、本来の「信仰」の力がなければならぬと思つています。

本来の「信仰」とは何でしょうか。人類文化史の最初からあつたものでしようが、時代や社会意識の広が

りの中で、変遷もあつたようです。まずは、自然人時代には自然現象を崇拜するアニミズム。種族が意識されるようになると、偶像崇拜のトーテミズム。その後、いろいろな社会が交流しはじめ多神教の時代となり、それを超え統括する国家レベルの宗教なども生まれました。

しかし、二十一世紀もまぢかとなり、情報も地球すみずみまで相互に行き渡ることができる時代となり、「世界大同」に向かつての新たな信仰のあり方が生まれはじめてきたのではないでしようか。

三十万年余、人類は多くの「信仰」の形を生み出しききました。宗教統計の本などでは、三千種の信仰形態があるとか書かれていますが、さらに絞り込めば三大宗教とされています。

キリスト教、仏教、イスラム教、儒教、道教等です

が、数千年の歴史をもつこれらの各宗教は、成立し発

展してきた地域の、地方風土や歴史背景、民族習慣などの色彩を色濃く帯びており、そこに一面、障壁も生まれてしましました。度重なる宗教間のいがみあいや宗教戦争により、幾多の涙や血が流されました。特に、十六世紀にはいつてから、東西交流が盛んになるにつれ、植民地の物資をめぐる争いも加わって、激しい国家間の戦争までおこることになります。

各自の宗教や国家の神に、ただ対象的に仕えるという狭い／信仰／的動機が、まだまだ残っていて、第一次世界大戦、第二次世界大戦では、短期間で何千万という生命が奪われるようなことにもなつてしまいまし
た。そんな戦争のお題目が、國家正義であつたり、文明だというのですから、おかしなことでした。

そのような種族、民族、国家にとらわれがちな十三大宗教的な信仰から、ほんとうに人類生存の要望にもとづく本当の信仰が、この近世になつて生まれ始めてきたようと思われます。

私は、そのような動きを、中東・ペルシャにおけるバハイ教、東洋・日本では大本教、そして南越のカオダイ教などの教えと歴史の中に入ることができると思つ

ています。

この近世に至つて生まれた新宗教は、神の直接的な啓示によつて生まれ、人類的な立場から宗教間の壁を乗り越えてゆこうという、そのような特色をもつています。大本教は二十世紀初頭に日本に成立し、カオダイ教は一九二一年に生まれました。両教ともに、人類の平和と新しい世界の到来をつげる同じ主旨・目的で開教されています。

しかし、日本とベトナムでは、風土も民族も体制も違いました。教団組織の作り方も相違します。しかし、相通じる信仰内容をもつています。

相違点となる時処位に応ずる部分にこだわらず、人類的に通じる本質的な部分に、つねに想いを到しながら、私の信仰していますカオダイ教の／開源歴史／を記してゆきます。

カオダイ教のあらまし

カオダイ教は、一九二一年に生まれた新しい宗教です。しかしカオダイ教は、古くからあるベトナムの民族宗教や、祖先崇拜の信仰世界に根をはり、そこから世界へと芽をだし、幹を広げています。

ベトナム（越南）民族の歴史は五千年と言われていますが、国を建てたのは一千六百年前、南揚子江の紅格という民族で、農耕文化を担い、南下して国を築きました。そのようなことから、中国文化の影響は深く、カオダイ教の教理の中にも、多く生かされています。

カオダイ教の信仰の対象は、宇宙至上の神。宗旨は神人合一。博愛と公平を高く掲げ、三教帰元・五枝協一（三教は仏教、儒教、道教、五枝は人道、神道、聖道、仙道、仏道）と、万教同根的な教も説かれています。日常生活は日々新日新々。いろいろな教義があり、それにもとづき教団組織も造られてきています。カオダイ教が々立教々するまでの五年間（一九二一～一九二六）、法的に認められてから一年間で五万人の信者が集まり、それは植民地政府（フランス）当局の不安全感をたかめることになりました。そのようなことから、政治的に内部分立させられ、三つに、四つに、そして五つに、最後には十二派に分立する結果となりましたが、分立しても同じ教理でした。

植民地政府は、カオダイ教を激しく弾圧し、その弾圧が激しければ激しいほど、カオダイ教は発展し、内に強い意志と忍耐力を培いながら信仰を守つてゆきました。

した。

この時期、自分の民族を守る、自分の祖国を守るということと、カオダイの信仰は同じ精神で、カオダイ教はフランスの植民地支配に対する愛国心を確かめる場ともなり、立教して三十年（一九五五）になると、四百五十万人の信者を集めることになりました。

その後ベトナム戦争が続き、一九七五年のサイゴン陥落と共に共産の支配が始まりました。聖会、教団は解散され、神殿、寺院はみな封鎖閉門されました。教職員は投獄され、信徒数も三分の一に減つて行きますが、獄中や法廷でも道を伝えました。カオダイの予言が実現するのを見て、共産党を脱党してカオダイに入信する人も少なくありませんでした。

現在カオダイ教は、全世界に三百六十万人、十二派統一、海外宣教機関本部も完成（一九九二）し、新たな信仰の段階にはいったと思っています。

カオダイ教創設の初期は、そのほとんどが上流知識階級や政府官吏・役人、旧学の儒家などでした。しかし神の前には絶対平等で、男女も平等、民族を超えて全人類は皆兄弟という教えは徹底しています。

信仰の中心機関は、タイニン（西寧）県に二百四十

平方^{キロ}の膨大な聖地を持つており、その中心にある總本山大本殿（聖座祖廟）に、宇宙至上の神を、大きな左目のシンボルで現わし祀っています。竜宮のような立派な建物で、長い植民地支配や戦乱のなかでも、この信仰の場が守れたことは、神の大きな力と信じています。

カオダイ教成立にいたる背景

カオダイ教は、ベトナムの南端地区で出現しました。

一八五八年以來、フランス植民地で、先ほど述べましたように、逆にベトナム国民の愛国心は強まつていました。グエン（阮）王朝（一八〇二～一九四五）の時代です。ベトナムは南北に竜の形をした細長い国で、南北に二四〇九^{キロ}の長い海岸線をもつていています。中国の二十分の一、日本よりは少し狭い国です。人口は二千五百万。長い間、この国土を守るために、この地に流された人々の血は、まだ乾いてはいません。

一九二〇年代、カオダイ成立のころは、すでにフランス植民地下にあつたわけですが、日露戦争で日本が勝ち（一九〇五）、ロシアでは無産革命が成功し（一九一七）、ベトナム国民には、大きな影響と自信を持

えたと思います。

しかし、国内にはフランス政府の支援を受けたキリスト教教会が都市の中心部に建設され、同時に大きな監獄も近くにつくられ、キリスト教に入るか、監獄に入るかという、威圧的な植民地政府の動きでした。このような政府の動きは、儒教や仏教に親しみ、信仰をもつていた知識人階級の反発を誘うことになり、反仏（反フランス）運動は、秘密裡に全国に広がって行きました。

ホーチミンは平民として西ヨーロッパに向かい、王族のクオンデ殿下は日本や中国にと出国外し、外国の勢力を借りながらの反仏運動の風潮も高まって行きました。

サイゴンに帰った帰国留学生たちは、街頭でベトナム（南越）の独立と主権回復を訴えて反仏演説を行い、官憲と激しく争うこともありました。学生、生徒、小生徒まで、デモに参加して、学校をボイコットするところもありました。

南越国民党、大越党、共産党などは、国民を三分に分けて、競争して反仏運動に取り組みます。一九一五年には、南越国民党は、兵隊を組織して武装闘争を開

始し、北越のタイグエン（太源）県アンバイ（安邦

山）でフランス軍と七度戦い、六年の努力も失敗して全滅し、ベトナム民族英雄十七名は、ビンロン（永龍）やミート（美樹）で、ギロチンで殺されたこともあります。

そのような時期、ベトナムの農村では、靈界との交流ということが盛んになっていました。一九一〇年から一九三〇年のころです。いろいろな方法が紹介されました。入壇法とか、遣魔法、迷鬼使靈法、等です。入壇法で亡靈と通信するとか、知りたい事を知るとか、盗まれたものを捜すとか、そんなことをしていたのです。また遣魔法によつて、地獄や黄泉の国まで行つて、親戚の祖先の靈を捜し、生前に金銀宝などを隠した場所を教えてもらうとか、そんな靈術が流行りました。いろいろ奇妙な現象もありました。交流する靈によつては、ベトナム祖国の将来や各個人の運命について、質問に答える靈もありました。

このような、祖国への思いや、靈的な環境を神は準備されながら、カオダイの出現を計つてゆかれたのだ

と信じています。

カオダイ信仰の歴史的な始まり

南越南の大都市サイゴン町市場の近く、ブルダアイン街、三六号一戸に一人の若い文官が住んでいました。彼は監督府（大統領府）に勤めていました。一八七六年、ショロン（大町）県ビンタイ（平西）郡で生まれたゴーバンチュウ（吳文昭）です。父は早くに病死し、長男で一人子の吳は、母と貧しい生活をしていました。

しかし学業に優れ、高校を卒業すると官吏学校に入り、一二三才で文官官位を与えられ、大統領府事務所に勤めることになります。

とても親孝行でした。母が病気になつて、三年間ほど西薬も東薬も効きません。失望の末に、彼は入壇法を使って仙薬を求めに行き、自動的に三日間菜食をして、処方箋を筆先で仕上げたのです。その薬を調合し母が服薬すると、一ヶ月も経たないうちに彼女の病気はスッカリなおり、元気を回復しました。彼はその後、たびたび寺に行つて僧侶達にも話を聞きました。

問もなく彼はタンアン（新安）県の県長として転勤します。とても良い県長として有名になり、一九二〇年にはハテイン（河仙）県に転勤してトリフ（知府）

という位に就きました。

この新任の地には、三百年前から建つていたキリスト教の大寺院がありました。阮王朝以前、キリストの宣教師によって建立されたものでしたが、信仰に火のついた彼は、この教会にもよく出入りすることになります。

しかし、一九一〇年の末には、フークオック（富国）島に転任することになりました。フークオック島は、タイ湾にある大きな島で、景色のきれいなベトナムでも有名な景勝の地です。タイソン（西山）の乱の時、阮王はここに避難したり、その後もマクチエンツー（莫天賜）によって開拓され、多くの歴史遺跡が残っています。寺もあり文廟もあり、ゴーバンチュウ（吳文昭）には神仙的雰囲気も感じられ、靈界との連絡を公用の童子（靈媒）を養成しました。

ダンという名前の童子でしたが、この島に来てから毎月、明月の夜に、入憧法を行い、靈界のいろいろな精靈から詩を貰つたり、社会國家の情勢を論じることを楽しむようになりました。そこで今度は自分専

してある夜、彼は靈界について、もっと知りたい

と思い、ダンと一緒に寺に行き、精靈と交信をしますと、何時も降靈する精靈がゴー（吳）に、「もし正神と接觸したいのならば、三年間菜食をしなさい。そうしないと弟子と認めないと、何も教えてあげない」と告げたのです。

彼は公務もあり、そのような菜食ということはとても難しかったのですが、その条件に従うことを決心しました。このようにして、彼は名前も知らない、姿も夢で一度も見たことのない神靈の弟子になつたのです。それは一九二一年一月八日の夜のことでした。

(つづく)

参考メモ

カオダイ教と出口王仁三郎・愛善苑の関係

一九三五年（昭和十年）秋、出口

となる。

王仁三郎聖師の指示で、大本の寛清
遼宣伝使はカオダイ教の聖地・タイ
ニンを訪問し、カオダイ教のファン
・コン・タック教主とあう。

教主は寛宣伝使に「あなたの来る
ことを心待ちにしていた」と歓迎。
カオダイの神示に、大本のことが出
ていたということである。（永潤一
郎氏－財団法人ベトナム協会理事－
が寛氏に戦後直接聞いた話）

大本とカオダイ教との提携書が取
り交わされたが、まもなく大本第二
次事件が起こり、昭和三十年の再交
流に至るまで、二十年間のブランク

ベトナムは、一八五八年以來、フ
ランスの植民地であったが、第二次
世界大戦で日本軍に占領され、戦後
仏解放勢力が、北部ハノイでベトナ
ム民主共和国を樹立した。

一九四五年九月にホー・チミンの抗
ムニンによって、カオダイ教信徒
はかつて日本に協力した反革命的存
在であるとして大掃滅をうけ、信徒
の犠牲者は五千人にはほつたとい
う。（【おほもと】一九五六年九月
号「越南通信」）

一九四五九年九月、フランスは再度
ベトナム侵略を試み、一九四六年、
南ベトナムに傀儡政権を建てたが、
これに対して一九五四年に独立闘争
が本格化し、フランスは破れ、ベト
ナムはジュネーブ協定で南北ベトナ
ムに分裂。

カオダイ教と大本の、戦後の關係
が始まったのは、この南北分裂の翌
年であった。
すなわち一九五五年、昭和三十年
八月七日に綏部みろく殿で宗教世界
会議総会が行われ、カオダイ教
からレイ・テン・フック・トラン・
ヌジエク・サン・トラン・ヴァン・
クエ、ニューエン・ヌジエク・ホ
ウ、トラン・ルーエンなどが参加。
一九五六年 昭和三一年四月に
は、みろく大祭にカオダイ教・ホ
ア、ハオ教の代表参列し、同年七月
七日には出口うちまる総長（出口和
明氏の父）が羽田発でベトナムへ。

十三日間滞在し、七月十日には現地にて内外宗教代表協議会が開催され、各宗教代表二十名が参加し、ベトナム宗教協力協議会を結成することに意見の一一致をみた。出口うちまはその名誉総裁に推戴されている。

一九五九年ころ、カオダイ教はベトナム和平のために非常に努力し「南北ベトナムは手を握って平和交渉をすべきである。ベトナム人同志が国内で血を流すな」という文書を両ベトナム政府に送った。これは結果失敗し、北のホーチミンからは「お前は南ベトナムの傀儡か」といわれ、南ベトナムの政府からは徹底的な弾圧をうけた。

一九六〇年、昭和三十五年、南ベトナム民族解放戦線が誕生して、北ベトナムと共に武力闘争を展開。南

ナム共和国が発足し、内乱状態になつた。六十三年以降は米軍の直接介入で泥沼化。一九七三年一月二十七日にパリでのベトナム和平協定に調印されるまで、いわゆるベトナム戦争の戦火のもとにあつた。その戦争中である一九六八年昭和四十三年十一月に、カオダイ教秘書長のトリエン・タンが参謀し、親善を深めている。

また昭和四十四年十一月には、伊藤栄蔵教学研鑽所長がヨーロッパの帰途訪問。

ベトナム戦争終了後、一九七三年八月には大本教団から古田光秋が、一九七四年九月には人類愛善会から出口昭弘、古田秋光、長谷川掬泉がカオダイ教を訪問。トラクター一台を寄付し、出口昭弘は農業指導を行い提携を深めた。

当時はまだ解放戦線がゲリラ活動

をおこなっていたが、北からの侵攻が進み、一九七五年四月三十日、解放戦線はサイゴンへ無血入城した。

筆者のグエン・ゴク・ホアさんは、昭和三十年代、留学生として在日本。当時東京在中の出口和明さんの家に寄留していた。帰国後、ベトナムの社会主義化にともない、一九七六年、一九八一年と一九八三～一九八九年、一一年六ヶ月間投獄されていた。

一九九二年、三十数年ぶりに来日し、同年三月十一日に愛善苑に來訪。

その後、一九九二年夏、一九九三年春の二回、カオダイ教への親善訪問がなされた。『神の国』一九九三年十一月号、一九九三年五月号にその報告記事がある。

力オダイ教の歴史（一一）

グエン・ゴク・ホア

天眼の出現

ゴーバンチュウ（吳文昭）はどうしても正神の弟子になりたいと思いました。命じられるままに菜食の生活を始めましたが、しかしトリフ（知府）という地方長官の公務は忙しく、やはり難しいと思うようになりました。それに「私が従つている神靈は、いつたい誰であるのか」と思うようになつたのです。

正神であると納得して拝することがなければ、心は定まらないものです。しかしその神靈は、まだ一度も名を名乗つたことはなかつたし、姿も現わしてこなかつたのです。その神靈の名前だけでも教えてもらえば、すぐに絵に描いて祀りたい。信仰の対象がハツキリしなければ、神の弟子という自覚も育みがたい。彼がそんなことを思いめぐらしているころ、変わった現象が現ってきたのです。

ある日曜日の朝官舎の庭で

した。彼はハンモックの上に休んでいました。すると一つの大きな眼が、一メートル位

はなれた彼の真正面に現れ、

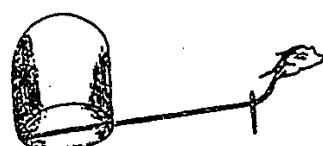
太陽のようにまぶしげほどに輝きだし、光っています。

びっくりし、恐くなつて両手で顔を隠したのですが、しばらくして掌を離しても、まだその眼は真正面に見えます。光はもつと強く、彼を見つめているでした。

恐くなつて、両手を合わせ

「仙翁さまを、こんな形で拝むのでしたら、弟子はとても恐いです。恐いので、すぐに消えて行ってください」と彼が祈ると、その眼はだんだん薄くなつて、静かに消えてゆきました。

勤務が忙しいので、彼はこんな出来事があつても、



大玉眼（139頁参照）



左眼ひとつのかオダイ教の御神体
タイニン省 カオダイ教本部神殿

ゴーバンチュウ（吳文昭）は、新しい黄色い紙をつかつて、ていねいに十字架の上にひとつの大好きな眼を描きました。そして家の真中にあつた高い仏壇に載せ、線香を上げ、次の靈界の通信の時に、靈媒のゲン童子を通して次のように神に語りました。

「仙翁さま、弟子はお見せいただいた眼の形であなたを礼拝させていただきます。それでよろしいでしょうか。もし違うようでしたら、お教えください。」

すると神靈は答えました。
「よくわかつたな。よろしい。私の名は、高吉仙翁だ。それだけで呼べばいい。しかし、これからは私を「先生」と呼べ。私はお前を「子」と呼ぶが、よろしかな。それから今日より、明聖經を誦じるのは止めなさい。」

ゴーバンチュウ（吳文昭）は、自分が拝んでいる神の名を初めて知ったのです。しかし、今まで聞いたこともない変わった名前だな…と思いました。まだ、

神靈が「明聖經」を読むのを止めよと言つたことが気になりました。
「明聖經は、自分の家の代々の崇拜した神様を讃える經典だ。その經典の神さまは、非常に偉い神様で、除

彼は神に詣び
「弟子が悪うございました。仙翁にお教しをいた
だき、その形に拂えまき紙に描いて祀つてしまひます」
そう祈願を終わったとき、眼は光と共に消えてゆき
ました。

罪滅懲をしてくださる。越南だけではなく、中国人も、その神を崇めない人はいないようだ。その閻聖帝君という神は誰でも知っているのに…」

彼はそう考へると、自分に臨んできただけ神靈は、閻聖帝君よりもっと偉いのか、そうでなければ…と、彼は不安になり、心配もし、毎晩考へ、最後に次のように納得しました。

あの眼が出現するのは、思い出せば、いつも同じ時刻、同じ方角だ。朝六時の卯の刻であり、真東。老子に「紫氣東來廣傳道德」というお経があるが、眼が出現する方向は、いつも東北の所、艮の宮、すなわち寅の刻。十二干で見ても、「天開於子地關於丑人生於寅」…これはとてもえらい神さまだ。生命ある万物を創造する神だ。やっぱり御天主さまだ。また、眼をもつて表現するということは、昔からとても深い意味がある。天の高いところから神は世間の事を何でも見ていることだろう。

そんなことが判つてきて、彼は非常に嬉しくなり、礼拝する神さまのシンボルを「天眼」とし、明聖經読経を止めたことも心配しなくなりました。

以後、彼はこの神靈とその教えにしたがい、一生懸

命に修業し、三年間の菜食の約束も終わりに近くになつたとき、神さまにあることをお願いしました。

「靈界には、極樂世界と蓬萊仙景があるという話ですが、本当にありますか。弟子はいつべんだけ見てみたいのです」

彼がそう言うと、靈媒のグン童子の手は、バタンとテーブルを強く打ち、神靈は返事もしないで昇天してしまつたのです。異常な霊験気でした。ゴーバンチュウ（吳文昭）は、無理なお願いで、神さまに叱られたのか…と思いました。

そんなある日、朝の散歩で海岸にゆき、岩の上に座つていました。さやかな波の音を聞き、はるかな水平線には雲が浮かび、蒼空と蒼海が溶けあうその光景を、非常によい気持ちで眺めながら、そんな景色によく合う張説の唐詩を吟じました。

巴陵一望洞庭秋
忽見孤峯水上浮
聞道神仙不可接
心隨湖水共悠悠

思われぬうちに無意識状態になり、彼の眼の前には変わった光景が浮かんで来ました。周囲はとても綺麗で美しい庭園に宮殿が並び、五色の祥雲に白鳳や黄鶴がゆるやかに翼を広げている。夢中になり時間の経過も忘れているうちに、われにかえりました。敷波の音が戻ってきました。太陽は東の空に高く、ゴーバンチュウーの帰り道を暖かく照らしていました。「やっぱり神さまは、私に天界を見せてくださった」と、涙を流すほどの喜びでした。

○

神さまに心を定め、魂を練るようになつてみると、ゴーバンチュウー（吳文昭）は官職の義務がいやになつて来ました。訴訟などの裁きはせず、当事者たちは、「争うのをやめなさい。家に帰つて、お互に相談して和平に暮らしなさい。互いに愛し合い助けあう、それでこそ幸福になるのだ」と語るような役人になつてゆきました。

当然、ワロトで太る汚職官吏達とはソリが合わなくなります。彼らは政府へ「知府は政府のために尽くしていない。決裁書類は山ほど積み上げられ、民の生活には無関心だ」と噂を流して行つたのです。

しかし汚職関係者以外は誰でも「彼は一番よい県官だ」と誉めていましたので、政府は転勤ということにして、サイゴン総督府に呼び戻しました。すでに母も亡くなつていましたし、三年間の島から大都市の中心地に移つても、現在の彼にはどこに居ても同じでした。どこにいても、高台の神と自分一人と思つていたからです。

一九二四年七月三十日、フーケオック（富國）島を離れました。タン童子と別れることになりますが、島での最後の靈界通信で、高台仙翁は次のように彼を誉めしていました。

三年労苦度一人
喜見徒心何怖恩
練得嬰兒時已至
堅持後日遇真宗

サイゴンに帰つたゴーバンチュウー（吳文昭）は、総督府に毎日出勤し、勤務時間が終わり宿舎に帰ると、きつちりと戸を閉めて人とはまつたく交際しませんでした。彼がなにをしているか誰も知らないという、そ

んな日々の生活でした。

教会やお寺にも、彼は行かないのですから、無信仰ではないかとも思われたようです。

二年後の一九二六年一月に、高台神の指示によつて次の展開が始まるまで、そんな日々が続いたのです。

世界第三回救済の宣言

大道三期普度の出現

当時、南越^{ナム}南はフランスの植民地でした。しかしふトナムの民衆の多くは、フランス文化を喜んで受け入れようとは思いませんでした。フランス政府の待遇で役人官吏になつていても、しかたなく働いている官吏も多く、國を救う機会を待ちかねていたのです。

そのころは外字の新聞雑誌には、神靈学とか、天界の謡を解くなどの記事が掲載されていました。まだ読める人は少なかったのですが、役員官吏達は、外語を身につけるのは一つの武器として修得に励んでいました。

ロンドンの雑誌、一九一七年に流行したワールド博士の死後の世界の話、自動書記や関連のベストセラー

本などがベトナムにも影響していました。

農村部でも農村らしい平凡な方法で靈界との交流を仰ぐではありませんでした。

企て、都會では諸情報を加味して、靈界との通信を行なうようになつていきました。

当時のサイゴン市でも、靈界と交信するいくつかのグループが秘密に作られていましたが、そのなかに、若い役人たちの集まりがありました。そのメンバーは、愛国心にあふれた文壇、学界、音楽等などの、次のような人達でした。

高瓊居（カオクインクー） 楽師

高瓊山（カオホイサン） 稅務長官

張有德（トルンフウドック） サイゴン密偵本部法律担当官

高瓊（カオクインイユ） 市役所書記官

武文原（ヴァバングエン） サイゴン図書館管理人

阮忠厚（ケエントルハオ） サイゴン紙記者

彼らは、山氏の家に集まり、そこを靈界との連絡を試みる場としていました。彼らは科学者のようなこだわりのない純真な気持で、もし靈界が本当に存在しているのならば、靈でもよい、鬼でもよい、早くでてきてほしい！^トと、通信を試みたのです。

その通信の仕方は、文献などから彼らなりに考えて、四角の小さいテーブルを使い、皆がそのまわりに座りました。各自両手を開いてテーブルの上に載せ、親指と親指、小指と小指をつないで一つの円を作ります。靈があらわれたら、皆の手を利用して、テーブルを動かすという実験でした。

それは一九二五年六月二十三日の夜八時で、歴史的事件がそこから始まってゆきました。
彼らはテーブルのまわりに椅子を並べ、真剣に心を集中しながらも、しかしどこか面白半分な気持ちで、靈を待っていました。三十分ほど経つと、テーブルが動きました。たびたび動き、一時間ほど続きました。休憩時間でお茶にしましたが、誰かがいたづらしてテーブルを動かしたのか…と互いに問い合わせても、誰もそのような事はしていません。

この現象を巡つていろいろ論議がなされました。この時点ではまだ、靈界など存在しないという人もいましたが、靈界や精霊の実在を信じる人からは、次のような意見も出されました。

「僕達は西洋文化に馬鹿にされ、靈界への信心や礼儀を忘れていたのだ。我々の間でも、礼儀がなければ互

いに行き来することもなくなる。先ほどの実験でも、僕たちは線香一本あげなかつた。それに天地の鬼神にも祈願していなかつた」と。

同意する意見が出され、さらに「靈界との通信ルールを作らないといけないな…」と、考えが展開してゆきました。

まず、テーブルの足をレンガで少し高くし、一本のテーブルの足は自由に地面を叩けるようにしました。そして靈が現れたとき、ベトナム語の二十九アルファベットを使って字を書けるように、靈と約束を行うことを考えました。テーブルの足で一回だけ床を叩いた場合は、ヨの字を指すなど、叩く回数によって指定の字を決めていったのです。

二回目の靈界通信の試験では、線香も一束供えました。皆がテーブルのまわりに座り待っていると、今度は案外に早く十五分くらいでテーブルが動き始めました。その時、一人が立ち上がり、靈界に向かつて通信のルールを読み聞かせると、テーブルはすぐに動きだし、それが止むと、高壇量（カオクインルオン）と云う名前が出ていました。

皆は感動しました。その名前は、三年前に死んだ高

瓊居（カオクインツン）氏の甥の名前でした。皆はまだ半信半疑の状態でした。居氏はすぐに「もし本当に君だったら、ここに居られる方々の名前も全部知っているはずだ」というと、すぐにテーブルは動きだし、順次に一番年上から一番年下の人まで、皆の名前を明白に答えたのです。皆はよろこび、いろいろと会話が始まりました。一時間ほど通信し、ついに居氏は、甥の「靈にたのみます。「お祖父さまと会った事はあるのか。お祖父さまをここまでお迎えすることはできないうどうか？」と問うと、靈は「出きますとも。少し休んで待つてください」と、そう返事して出かけた様子で、テーブルは静かになりました。

席を外して十五分間位お茶を飲んで待っていましたが、次の三回目の通信では、誰が出てくるのか分かっているわけですから、居氏は父親の靈を迎えるために、服装を直し、お線香を仏壇につけていました。

テーブルに座つて十分も経たないうちにテーブルが動きだし、文字を次々と送り出してきました。高瓊鄧（カオクインツン）、これは居氏の父親の名前でした。

居氏はすぐに立ち両手を合わせ、「お父さまの」昇天の時は、一番上の兄も、僕たちも

皆まだ小さかったので、なにも知りませんでした。もしよろしければ、今回はお父さまご自身の詩を一首をお作りいただければ、代々子孫に伝えて記念といたします」と願うと、即時にテーブルが動いて、一息で次のような唐律詩一首が現れてくれました。

離塵時已五余旬

君等十年未滿春

愛子文留碑石刻

憐孫德積墓心張

珠簾柱魄稀曾往

樹殿香魂得永祥

感境質妻身老若

相逢今喜記懷章

このタッピングテープルを使っての靈界との通信は、居・則・山達のグループでは初めてでしたが、大成功でした。

彼らの好奇心を満足させるためには、まだまだでしたが、靈魂の存在がハッキリと確信でき、人生の意味

や生活の方針も定めてゆくことができるようになります。した。居氏は、嬉しいばかりか、感動して涙でぼろぼろになつてきました。老母は、詩の内容は、生前の夫の文章と精神そのままであるといい、死んで行つた父が生きかえるようでした。

さらに霊界との通信が進むと、それは単なる解愁法ではなく、もつと重大なことの始まりだという認識が進んで来ました。テーブルに来る霊には、魔も鬼もいるし、妖精もあれば神仏もいるはずで、なんだか油断できないとの結論でした。

毎週土曜日の夜、彼らは霊界との通信を行い、いろんな事が現れました。雑談的会話もあれば、国の動きや民情を漏らす霊もあり、皆の興味は尽きませんでした。

一九二五年七月二十六日の霊界通信で、ドアンゴク
クエ（团玉桂）という女性の名が現われて来ました。
クエ（居）氏が霊に「あなたは生前どこにいで、どういう仕事をして、どんな風に死んだのか」と聞くと、霊は「イユ（瑞）さまのアミ（彼女）の王氏礼女史にきけばわかります」と返事をしました。霊が教えたお墓にも行つてみましたが、皆はびっくりし、「かわいそうだ。よければ事情を

聞かしてください」と頼みました。

そんな解脱できないような霊が来るときは、なんとか気味が悪いのですが、その霊はすぐに次のようないい詩を作りました。

失恋詩

憂懷心事措相誰
才色青春命薄虧
玉閣約交縁已既
泉台不幸債清帰
養生情海山甘枉
糸髮義梅竹恨歎
三世相思愁段段
憂懷心事措相誰

この詩を見て、皆はアツとびつくりしました。天才的な詩だったのです。「死んでしまったのは残念だ。家はどうだった?」と聞くと、霊は「イユ（瑞）さまのアミ（彼女）の王氏礼女史にきけばわかります」と返事をしました。霊が教えたお墓にも行つてみましたが、が、事実でした。

このドアンゴククエ（団玉桂）の靈と交信するのが楽しみになり、彼らは毎日勤務時間が終わるのを待つて帰宅し、食事を終えると、早速に山氏の家に集まり、通信を行いました。ドアンゴククエの靈とは、生きた人間と同じように詩歌を交し合い、楽しい交流の時を持ったのです。そして彼らは、その靈も入れて、朋友兄弟の契りも結びました。

居氏は一番上で長哥（長兄）です。

則氏は二番田で二哥。山氏は三番田の兄で三哥。彼女は一番末で、四妹となりました。その噂が広がり、いろんな詩人や文豪がやってきて、靈との交流を楽しみ、詩を賞したり歌を詠つたりして、賑やかに集まりになつてゆきました。

そんなある日、名を名乗らない靈と通信していると、次のような歌が出てきたのです。

アソビニイキタイシ（遊びに行きたいし）
ユエニヨツテミルノジヤ（由に寄つてみるのじや）
ヨリタイヤノ一（寄りたいやの）
ケレドダレニモ（けれど誰にも）
ヨリタクナイ（寄りたくない）

それだけの詩文でしたが、なんだかとても面白く、

原文の意味は妙で、半分皆をからかうようです。

靈に名前を聞くと、テーブルは一回、そして二回そして三回叩いて終わりました。読めばAAA（スリー・エー）で、まだ名前にはなりません。また聞くと二度目の返事もそれだけでした。皆は、この靈は自分の本名をまだ教えたくないからだろうと納得したのです。しかしその後、靈界の通信を行うと、毎回その靈は現れました。詩歌はすぐれており、居・則・山の三氏が、国情のことや世情のことを質問すると、いろいろ答えてくれる。親しくなつてゆきましたが、何度もほんとうの名前を尋いても教えてくれない。仕方なくAA（スリー・エー）さまと呼ぶようになりました。

AAAは、名前や国事政治のことを質問することを止めてくれれば、靈界のよい事を教えて上げると、三

人に約束しました。三人は、どうもこの靈は親戚の靈であるに違いない、だから名を隠すのだろう、靈が作る詩歌の中に正体を探しだそうと、この靈とのかくれんぼ遊びが始まりました。

そうしてこの年（一九二五年）の八月上旬に、A A Aは嬉しそうな様子でタッピングテーブルに現はれました。

「君達に偉い女の仙人達を紹介する。群仙の主母も来られるぞ。君たちは迎えたければ静音をして菜青の宴会を開いて接待するのじや。皆は詩文は非常にうまいぞ。君達が望めば、今月の満月の日に」と伝えたのです。彼らは群仙を迎えることを、喜んで約束したのです。

○
群仙との宴会の日が近くなつてくると、彼らはどうして靈達との宴会を持つたらいのか、まつたく分からぬわけで、その準備の仕方を、四妹ドアンゴククエ（团玉桂）の靈から教えてもらうことにしました。そのころは、昼間でも靈界と通信を行ひはじめており、クエの靈がすぐ現われました。そして一人の女の靈を紹介したのです。ホンリエンバツ（漢蓮白）とい

う仙人らしい名前でした。互いに喜んで挨拶しましたが、新來の靈がどのような詩才を持っているのか確かめて見たり、山氏はすぐに「送別情郎」と云う詩題を出しました。すると靈は、暇もなく一息に、次の律詩を歌いだしたのです。

送別情郎

長亭分鏡別時盟 金石百年刻此情
分路送懷斜日落 交言愁憶月園青
帰期雲望千桑暗 待夜燈殘一影傾
到看孤房春自問 遠方誰感義丁寧

八娘瑞池宮漢蓮白

まつたくすぐれた詩で、三人とも感服しました。三人も凡人の詩で下手ながら、答礼のために一首づつ歌を詠いました。四妹の桂は、

「今度の宴会は、瑠璃金母娘がご降臨なさるので、外に九位の仙娘も来られます。四妹はその中の一員として参加させて頂きます。一緒に来ているホンリエンバツ（漢蓮白）は八番目の仙女ですから、私達二人を八娘と七娘と呼んでいただければよろしゅうございます。

宴会の事ですが、花と酒とお茶だけでよろしと思ひます。外に果物と菓子があれば結構ですが、煮物や焼物などは、絶対に出さないでください。清淨と清潔がもつとも大事ですから。あなた達諸兄は、三日前から菜食をお取りになるよう。最後にタッピングテープルは少し不便ですので、大玉機に代えてお使いになるよう。今日は私は、八娘仙人と相談した上で、諸兄にお知らせに参りました】

と宴会の準備など教えました。

宴会の準備は簡単すぎるほどですが、問題は大玉機のことです。彼等には初耳でした。どんなものか、作るのにどれだけ日時かかるか、皆が心配しました。しかし、その話が伝わってゆくうちに、その器具を持つている人を知っている人がいたのです。彼はカオクインイユ（高瓊瑤）氏の同僚で、ファンバンティ（播文比）という人でした。彼は他の神靈学研究のグループが、大玉機を使って靈界とたびたび通信しているのを知っていたのです。

そのグループは、ハイクラスの人ばかりの集まりでした。トルオンバンホアイ（張文惠）は国民代表、ドアンバンバン（団文本）は高等学校の校長です。レー

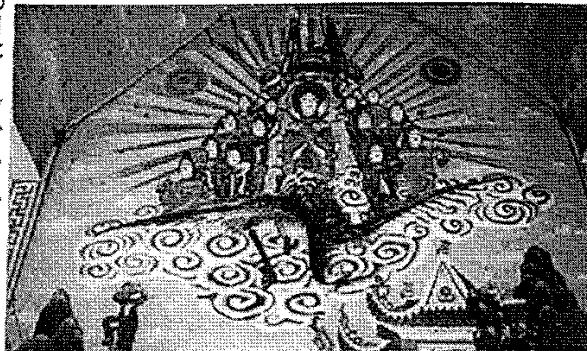
ブータイ（黎宝才）は督府使、トランバンクエ（陳文桂）は文学博士で、のちに文部大臣。そのような人達が、サイゴンの太和寺や明新寺、閻聖廟などで集会し、靈学研究を進めていたのです。

この大玉機というのは、中国の紅卍字会から流れてきたもののようです。その形は北斗七星の大熊座のような形で、丸い籠口は直径三十三センチ、外側は黄色い綿をかぶせ、上に八卦の靈符がはりつけてあります。

籠口の方に長さ七十二センチの柄が一本つき、その先端に鳳が形作られ、近くに直角に十一センチ位の一本の筆が着けられています。使用するときは、童子一人で籠口の両側を両手でつかみ、靈が降りてくると、靈がその籠を動かし、移動する筆先がテーブルの上に字を書きだすことになります。

漢字でもカンボジア字でもフランス語でも自由自在に書き出します。近くに立つ人がそれを見て、文字の影を読み音に聞かし、記録してゆきます。テーブルタッピングよりも便利です。

しかし靈を招請するときは、呪文を唱える法師が必要になります。そうしないと、なかなか一人の童子は脱魂しないからです。



カオダイ教本部 報恩堂
王母と9人の仙女と4人の供

仙女達との宴會に間に合わせるため、居氏たちは、そのグループを訪ね、大玉機を借りることができたのです。

新時代への神人会合の宴

約束の中秋

の節となりました。十五夜

の月は丸く、風は涼しく、宴會場はとても重厚尊

厳に準備されました。大きく白い十二本の蠟燭の光のまわりに、十組の花が瑠璃色の花瓶に挿さ、お香の薰りは豊かに流れ、花模様の刺繡入りの白いカバーブ団つき椅子が各所に並んでいます。各テーブルには、グ

ラス三個、洋酒各種に、茶碗は上海製土器、長いテーブルの上には、紫と黄色の小花が散らしてあります。家の中央部に設置された大玉機は、テーブルの上に香炉と一緒に並べられ、線香の煙は八方に広がりつつ天

上に昇っていました。七人の宴會接待者は、皆長い服を着て香水をそんぶんに着けていました。まるで地上天国のような、宮殿のような雰囲気でした。

夜八時になると、高い空から靈鳥の鳴き声が響き来るようで、月光が白い雲の間から輝きだし、光は八方にそそぎ込み、周囲を照らし輝かします。涼しい風はそよそよと吹き、樹木や草花はささやくようです。花瓶の花は笑むように揺れ、香りが広がっています。ちょうどその時、童子たちは「群仙が降臨なさいました」と、鐘を十二音三度ならして合図し、迎えたのです。

みなは祭壇の前に集まり、お線香を上げ、童子達はすでに手に神託を伝達する大玉機をもち、籠を三、四度位、空に飛ぶように円形に回し、そして筆先が始ま

りました。最初は金母の神で、詩一首を詠いだされました。それは「瑞池宮会宴」という題の八句唐律詩でした。それを受けて皆は琴を弾き合唱し朗誦するわけです。

群仙の女性たちも、一娘から九娘に至るまで皆一首の唐詩を詠い、各仙女は自己紹介をし、宴会を記念する言葉が続きました。最後に居・則・山の三人は、音楽演奏にも優れていたので、群仙を喜び迎える詩を詠いつつ合奏しては、諸仙に捧げたのです。

入宴する時、王母娘娘は、三氏も同席するよう命じたのですが、彼らは尊敬の意を表して、別の椅子を三個持ってきて、後の方に並んで座って、音楽と詩吟を続けました。

接待は順序に、一巡の花、三巡の酒、一巡のお茶と、王母娘娘に一番先に、九娘はその次と、順番に捧げ、居・則・山で終わりました。詩文和韻詠吟音楽和奏の楽しみや、無尽至極の樂風、青氣に三時間は経過しました。

月が西の山に向かう時、諸仙は帰つてゆかれました。この「瑤池宮会宴」は空前絶後のことと、皆に非常に深い印象を残したのです。二千二百年前の漢武帝の時代、西王母を恭迎して開いた宴会があつたそうです。が、今度のように神靈と人間とが会合し宴を行うのは、始めてでした。後になつてカオダイ教は、このことを記念し、毎年

仲秋の節大祭を行ひ、同じ状況を祭儀でくりかえすのです。

人類の信仰史上においても、とても大きな意義を持つのではないしょうか。人間界のみでなく、靈界と一緒にした世界の解脱の道が、すでに目の前に見えるようになつてきただけです。

次の日、靈界通信にAAAの靈が現れました。その靈に対し、皆がよろこんで感謝し、質問をしました。「群仙の皆さんに来ていただいて、とても楽しかった。しかしどうして、あなたは来てくれなかつたのですか」「いやわしは來ていたよ。最初から最後まで、みんなの側にいたよ。だけどわしは皆から見えないようになんだ」と靈は返事しました。

則氏は「しかし仙女の皆さまは、貴方を見ていたのですか?」と尋ねました。

「いえ、諸仙も私を見るとはない」と答えたのです。皆は驚いて「そんなに高いご神格なのか…」と叫びました。なぜ群仙がAAAさまを見ることができないのか、天界での神靈がどれほどの権威を持っているのか、みなで話しました。

「群仙達よりも、また瑤池金母さまよりも偉いに違い

よべ。そして私は君達を子と呼ぶ。よいか。これから君達はわが道を広く伝布してもらいたいものだ。この重い責任を君達は担当してもらえるかね。私は今まで君達が恐れないように、名前も隠したのだ。そうしなければ、君達をこの道に導くことができなかつたからだ」

タク氏は

「そうでしたか、先生。今までいろいろと教えてくださいましたが、一部しか理解ができるいないのです。この重大な役目を果たすことができるかどうか、心配です。責任が重いので弟子達は心配しています」

と答えますと仙翁は、

「もし君達が一心にして誠を尽くすならば、いつも私は側にいるから、心配いらぬ」

と、筆先でそう示して来ます。

三人は、頭をさげてカオダイ仙翁の命令を承諾することにしたのです。

まもなく則氏は、カオダイ仙翁さまに申し入れました。

「先生、私は先生の教えに絶対的に従います。そして先生の命令なら何でもします。しかし、私、このファ

ムコンタク（梵公則）は、老子さまのようにはなりたくない、お釈迦さまのようにもなりたくない。私は人間として人間らしく、この越南の国で、奴隸ではなく栄誉ある人間になりたいだけです」

カオダイ神は、

「それでもよい。君の徳行とその性質を基本にして立教するのじや。国教にしたらどうじや。

しかし、せまい範囲では考へないでくれ。わが道は、全世界の万靈衆生を救済するために開くのだ。以前、私の命令によつて、数々の宗教が成立し、無量の法門も施していたが、年と共に変移し、聖教は凡教になつてしまつたのだ。

そういう訳で、今回は私は自ら降りて、各宗教を統一し、元の道を復元する。私は天の最大恩恵をもつて最後の救済をするのじや。

君達は知つてゐるか。その目的を達成するために、わが道は「大道二期普度」であり、称する宗旨は「三教帰元五枝復一」だ。分かつたね」

このように、カオダイの神は教えましたが、国教を樹立するとの約束に、彼らは非常に喜び、舍身活躍することを願いでたのでした。

(続く)

カオダイ教の歴史（二二）

グエン・ゴク・ホア

救世主（キリスト）の再降臨

居・則・山の三人にカオダイの仙翁が大道二期普度の大道を示したその一週間後です。一九二五年のクリスマス・イヴの夜に、カオダイ神は、筆先で次のようなメッセージを伝えてきました。

「萬劫有吾掌主權
喜修可願享恩天
道真妙布伝全地
千載性名守永編

わが子達よ！今日は喜びの日だ。

今日のこの日は、昔、太西（ヨーロッパ）に道を開くため、この塵世に降臨した日だったのだよ。

あなた達が、このように私を尊敬してくれているのは嬉しい。この家には、もつと神の恵みが満ちて

くるだろう。靈妙なことも神界から顯してあげるから、私への信頼や敬愛をもつと深く親しいもの、高いものにしてほしい。

今まで私は、A A A の名前であなた達を導いてきた。それは、あなた達を眞の道に導くための配慮だったのだよ。私のことを本当に分かつてほしかつたから、符号のような謙遜したような名前で出てきた。あなた達が道を開くときも、このように謙譲してほしい。そのような徳を学んで欲しいと思ったのだよ」

レバンチュン（黎文忠）の入信

年明けて一九二六年の一月十八日です。カオダイ仙翁は、この三大弟子（居・則・山）に、靈界からの神示を伝える大玉機をもって、レバンチュン（黎文忠）

代議士のところに行くことを命じました。

この指示に三人はとまどいました。

レバンチュンは、「北斗彗星」という名譽勲章をフランス政府から授与され、いろいろ特權ももらつてゐる人物です。名門の偉い官吏です。三人は彼に会つたことなど、まだ一度もありません。身分も違います。行つても会つてくれるかどうかも分かりません。しかし神さまの命令です。しかたがない、行つてみなければ…と、彼らはショロン町のテスター街にあるこの代議士の邸宅を訪れました。

しかし思わぬほどに簡単でした。門番に取次をたのむと、すぐに連絡がとれたのです。「申し込みのない初めての人達ですが、閣下にお会いしたいと門のことろに三人きておられます」との連絡に、すぐに通すよううにとの返事がありました。

使いがやつてきて、屋敷に迎えられました。チュン（忠）氏は正規の服を着し応接間に立っていました。席に着き三人は自己紹介をし、神の命令でお伺いしたことを話したのです。

チュン氏はカオダイの仙翁の御名に関心を示し、三

「私はこのよくな俗世の人間です。しかし、あなた達をここに派遣までしていただくほどに、神さまからのご好意をいただき、本当にありがたいことです。ご苦労さまでした」と感謝し、相談の結果、一週間後の吉日にチュン氏宅に祭壇を設けて、カオダイの仙翁を迎えることになりました。

旧暦乙丑年十二月十五日、新では一九二六年一月二十五日、チュン代議士宅で、次のような筆先が出されました。

「王皇帝白高台仙翁大菩薩摩訶薩教道南方
喜諸門弟！ チュン（忠）吾子よ、よく聽け。以前

師は李太白に命じてあなたを導くために、チオガオ（米市）に降り示したことがあつた。

チュン、わが子よ！一心一志になつて、師（わた）しに従うがよい。生死を越えて師についてくるのだよ。あなたの目に光が戻つたことを、忘れてはいられないね。

この神の道は、三度目の世界人類救済のために、
「大道三期普度」という旗印のもとに發展させてゆく。

儒白、一天一地一家私 教化人生伏善慈

守得天機萬種教 完成人道是仙如」

この筆先は、チュンに書き悟るものがありました。

約半年位前に、彼は病気になつて眼が見えなくなり

ました。そのとき、有名な眼科博士のいるレーバンホ

アット病院で治療をうけたのですが、それでも治りま

せんでした。そのころ、ゴコン県（孔雀岡）のチヨガ

オ町（米市）に、靈界から仙人が降りてきて病気を治

すとの話が耳にはいつたので、チュンははるばるゴコ

ン県に行き、自分の眼が治らないかと伺いました。そ

の時、李太白大仙が降りてきて、筆先で詩一篇を書い

たのです。それは「病従口入」ということや、夕近い

うちに天命があり、神の使いになるだろうから、それ

を持ちなさい」という内容でした。

チュンはその詩意をつけて反省し、酒と肉食を止め、

阿片もやめると、自然に目が見えだし、元の通りになつ

たのです。

チュンはその結果だと思っていて、ちょうど

その時に、知らない三人の客が自宅を訪れ、カオダイ

そのような奇びな体験から、チュン氏は、カオダイの仙翁を師とし、官職も止め、仙翁の道の布教に、舍身活躍で専心することになったのです。

弟子たち集まる

一九二六年一月四日、旧暦では乙丑

年末の十二月二十五日、カオダイの仙翁は、居・則・

山のグループや忠氏に示しました。

「サイゴン市のブルダイン街の百十番に居るゴバン

チユ（吳文昭）のところに行け、師を礼拝する仕方を

教でもらうようだ」

という神示です。

翌日は皆の休みの日でしたので、チユ（昭）氏の宿舎を訪問し、ドアをノックすると、童子が出迎え、二階に案内しようとした。

ちょうどその時です。他の五人のグループもチユ

（昭）氏の宿舎を訪れ、門のところに現れたのです。

晴れやかな宴会に参加でもするように、立派な服を着

ていました。

皆で一緒に二階に上がりました。初対面ですから、自己紹介となりましたが、みな社会的に地位のある有

名な人ばかりです。それに、訪問の目的を打ち明けると、双方とも同じ神示での訪問で、一様に驚いたのです。

チユ（昭）氏は童子を使って神の意向を伺いましたと、朝十時、次のようなメッセージが送られてきました。

「玉皇上帝白高台仙翁大菩薩摩訶薩、

道教南方、臺諸門第

わが子たちよ、よく集まつたね。時期が来たんだよ。衆生を救うために、私の道を公布するのだよ。

詩

昭期忠度引懷生 本道開山貴講成
厚徳則居天地境 還明敏到守台名】

この詩の内容は、カオダイ大道の活動方針を示し伝えるとともに、ここに図らずも集まつた十二大弟子の名前が読み込んでありました。

昭は、コバンチユ（吳文昭）。知府

期は、ユンクアンキ（王光期）。督府使

忠は、レバンチュン（黎文忠）。代議士

懷は、トランバンホアイ（陳文懷）。県行政委員長

本は、ドアンバンバン（園文本）。校長
山は、カオホアイサン（高懷山）。海關稅官
貴は、トランバンクイ（陳文貴）。教師
講は、ファンバンジヤン（蟠文講）。校長
厚は、グエンチュンハアウ（阮忠厚）。新聞記者
徳は、トルンフウドウク（張有德）。サイゴン中央
警示序法律担当官

則は、ファンコンタク（梵公則）。税関検査官

居は、カオクインクー（高瓊居）。樂長

還、明、敏（ホアン、ミン、マン）この三人は、参拝にきていた人達でした。

このように、別々に神の導きを受けていた三つのグループが、神のまにまにに集まつたのです。イエス・キリストが、十二使徒をゲッセマネの園に集めた最後の晩餐を思わせるようなものでした。

有力者の入信

五日後は、旧暦では丙寅の新年でした。

元旦の朝、コバンチユ（吳文昭）は、ファンコンタク（梵公則）とカオクインクー（高瓊居）を伴ない、十二弟子の家を訪問しました。カオダイの神は、十二

弟子の一人づつに祝いの詩を与え、チユ（昭）氏は、皆に代わって神さまへの祝詞を奏上し祝福しました。一九二六年以降、お筆先は人を導き救うための一番重要な武器として活用されてゆきました。神の指示で、宣教のために四つのケループが作られ、神の言葉が直接にお筆先として伝え広められてゆくことになりました。

陰曆一月十日の朝、チュン（忠）とタク（則）とダイ（ファンタンダイ・范進達）の三人は、神の命によつて、ショロン街地区のグエンゴクトウ（阮玉書）といふ県の衛官（名譽官職）の邸を訪ねました。この人物は、百万長者として有名な有力者であり、非常な美男子で、唐詩などで有名な幡安の再生だとの噂は、サイゴンでは誰もが知っていました。

グエンゴクトウ（阮玉書）は、「カオダイの神さまがあなたに教えたことがありますので、お知らせにまいりました」との挨拶や、有力者であるレバンチュンの名前を聞いて、丁寧に接待はしてくれたのですが、しかし神さまの話には無関心を装いました。
「私は昔から仏道に従つてゐるものです。お釈迦さまをちゃんと祭つています。どうぞご覧になつてください」と

言い、さらにトウ（書）氏は疑いをこめつつ、「あなた達には、どのような偉い神さまがおられるのですか。見えない世界のこともハッキリ教えてもらえるような、そのような本当の神靈の現れならば、私は改信してあなたの方の神さまに従います」と

と言うのでした。

その失礼な言葉つきにチュン（忠）達は、クもう引き上げようかという気持ちを起きましたが、クもしこの男を神の道に導くことができれば、伝道活動の大きな力にもなつてくれるゝと思い、気持ちを鎮め我慢しつつ、トウ（書）県官に「何を教えてほしいのですか」と尋ねました。

彼はすぐに

「私の妻はブンリームにいますが、今何をしているか、そして何時こちらに帰るのか、それを知りたい」と言いだしました。

三人はこれを聞き、こみあげそうになる笑いを懸命に押さえました。

「さつそく、カオダイの神さまにお伺いいたしましたよ

と、靈界通信の準備を始めました。トウ（晝）氏は仏壇に線香を立てながら、疑わしげに見ていました。
靈界通信が始まると、最初にカオダイ仙翁がお筆先に現れ、次のような詩文を伝えたのです。

「宝座歴色起増花

宝座に花がきれいに咲き増える

後日全枝合一家

あとでは幾つもの宗派もひとつになる

道徳昌明修協力

道徳を盛んに明らかにするために協力し

堅心從我顯如何

誠心で吾に従い榮光を明らかにしてゆこう

トウ氏は、あなたのことろを訪れなければならぬ理由があつたのです。つぎの第三回の龍華大会に、あなたには大きな役目があり、早く努力準備しないと間に合わないからです。分かりましたね。今日はこれまで

その次に筆先にあらわれたのは、觀音菩薩でした。

觀音さまだというと、トウ（晝）氏はあわてて筆先の出でいる壇の前に来て膝をまげて礼拝しました。

その筆先には、ロンスエン省にいた彼の妻のことが、ことじとく書かれていました。そしてその日の夕方五時に、彼女がサイゴンのその家に帰つてくると書かれてあつたのです。

靈界通信はそれで終わり、トウ氏は茶会を開き二人を接待しました。

トウ氏は、紙に書かれたお筆先を丁寧にたたみ、ポケットに大事にしまい、「殘念ながら、神の予言をスッキリとは信じられない」と話していました。

「私の妻は、今日は絶対に帰つてきません。もし帰るならば、もう今の時間にこの家に着いているはずです。ロンスエンからサイゴンまでの距離は二二三〇キロ、二回渡し船にも乗るわけで、四時間はかかりますが、それ以上になることはありません。いつも大体今頃家に着き、それより遅くなることはありません。

また妻は実家で正月を迎えて十五日、門松がとれるまで、そこにいなければなりません。土地の寺で上元の節に参拝したり、一千粒の田園をもつていて、千人以上の小作人に今年の耕作の指示もしなくてはな

りません。十五日まで彼女は忙しいから、家に妻が帰つてくるのは、まだ一週間先ですよ」と、皮肉っぽく言いました。

しかし神の予言を信じる三人の自信は揺らぎません。トウ（書）氏に新しい信仰について熱心に説明しました。予言が真か偽か、これが明白になるのは時間の問題です。あと三時間で判明することです。トウ（書）氏は三人の話を聞き流しつつも、予言された五時が近づくにつれ、次第に緊張してきました。

ちょうど五時です。自家用車のクラクションが響いてきました。彼は驚きました。「妻がほんとうに帰ってきた！」と喜びの声を上げました。

若く気品に満ち、きれいな衣装をつけたトウ夫人は、車から降り、一人の侍女を伴い館に入ります。天女のように美しく、皆の前に姿を現しました。トウ（書）県官は、すぐに三人の客人に夫人を紹介しました。

彼女はマリキユリ女子高の出身で、当時はサイゴン家政学校の校長をしていました。彼女は、「チュン（忠）代議士や靈学研究の皆さまと会えて光榮です」だと言いつつ、「今朝、急にサイゴンに帰りたくなつ

たのです。なぜなのか、不思議なのですが……」と語りました。

夫のトウ氏は、「お前が帰つてくるのを、今朝から待つていたよ」と、愛する妻に語りました。

「お前が実家でなにをしていたか、私は全部知っています。家に着く時間もちゃんと分かっていたんだよ。お前は、私にも隠すことはできないからね」妻は、少し反発するようだ、ほほえんで言いました。

「あなたは疑い深いお方ね。密偵を使って私を見張つていたの。嫌な方ね」

トウ氏は妻に誤解されでは大変だと、あわてて、「そうじやないんだ。密偵なんてとんでもない。観音さまが教えてくれたんだよ。この三人のお方のおかけで、この家に神さまが降りてくださったんだ。本当に。その御筆先の記録を読んで聞かせてあげよう」と、ポケットからお筆先の記録をとりだし、読んだのです。

夫人はびっくりしながら聴いていました。自分の行動や考えたことを、心の奥まで読み切ったような透明さで書かれていたからです。そしていつもの帰宅の時間に三時間も遅れたことを、自分から説明しました。

ブンリームを出発する時に、はや一時間遅れ、そして河を船で渡るとき、バッテリーが上がりてしまい、チャジのリレコンタック（自動車部品）が効かないのと、二時間ほど修理に時間がかかり、夜までに帰れるかな…と心配した、と。

事実が判明し、一同は不思議な思いに浸りました。みな神さまが先に設定されていたのです。

この県官夫妻は入信し、カオダイ立教宣言のときは、ラムティイタン（林氏青）夫人の名前は、名簿の先頭に載せられることになったのです。

カオダイ教の立教と組織

玉皇上帝、すなわち天のご先祖の神さまが降臨したという噂は、全国に広く伝わってゆき、その福音に各地から人々が集まりはじめました。お筆先にふれ、神さまを挙げ、病気を治してもらい、入信する人達も増えてゆきました。それは勃然とわきあがってくるような動きになつていつたのです。

社会的影響もありますので、治安当局であるフランス植民地政権に、カオダイ教の立教を知らせなくてはなりません。その年（一九二六年）の九月二十六日に、

サイゴン市内で二百七十四名の信徒が集まり大会を開きました。そして二十八名の連名で、開教届出をコーチナ政府に出したのです。

開教届出名簿の先頭に、ラムティイタン（林氏青）女士、次はレバンチュン（黎文忠）代議士と、総勢二十八名の氏名が記されました。

コーチナ副総督であるルフオアは、この届出を受けとつたものの、とても心配になりました。カオダイの信仰が成立し勢いをつけてくると、自分達の依拠するキリスト教への妨害ともなりかねない。なんとかこのカオダイの勃興を押さえ潰しておかないと、フランス植民地政権が倒れてしまう…と恐れたのです。

法律上は信教の自由は保証されているわけで、カオダイ教の存在は合法的なものとして認めざるを得ません。一応認めるものの、植民地政府はトラブルが起こる機会をねらい、これを押さえようと思つたのでした。諸祭典を行うためにも、祭場となる場所がなければなりません。信者の数は日毎に増えて、大きな場所も必要となります。そこでサイゴンから東北に百キロ離れたタイニン（西寧）県にある仏教寺院を借りる計画

を立てました。そのお寺は、慈林寺という有名な寺院で、住職は如眼和尚（六十歳）でした。そのお寺は、中国南宗仏教の林済派でしたが、如眼和尚はお筆先にふれてカオダイの神の弟子となり、お寺は無期限貸し切りということになりました。

このお寺はとても古くなつていましたので、建て直す必要がありました。カオダイの信者たちは、功德が積む機会ができると、積極的に物資労力両面を奉仕し、ゲンゴクトウ（阮玉書）がそれを統括する担当になりました。

この慈林寺を基地として、神さまはカオダイの基礎を作るために、次のようなことをくわしく指示しました。

十月十五日までに作り、三教そろつた大会では、それを通過させなければならない。
祭祀儀礼を刷新し、大道三期普度の新式で定める。

師は、五枝（五教）を一つにして、君達は全部集まつて私と一緒にひとつのお家に住む。私は父であり、総領である。分かつたね。

今から越南国には唯一の真実な宗教が生まれる。それは師の道であり、私はそのためにこの塵の世に降臨し、国教たるこの宗教を成立させた。

君たちは、智を注ぎ心を合わせて力を尽くさなければならない。これから苦勞も多いが、師がらみなそれぞれに適う仕事を廻すから、忌避しないで、なしそげてほしい。別派分枝のようなことを起こすことは、とても罪深いことなんだよ。わかつたね。すべてこの立教の大会のために集中したまえ」

「種宗自後不分三
我協諸徒到一家
南北窮通傳国外
主權真道不由他
わが子等よ、師はここに聖なる部屋を建て、君たちと同居共生する場所とする。
師は三教をひとつにし、新しい法律（教え）を

このように細々とカオダイの仙翁さまは教え指導し、その機關を「カオダイ聖会」と名づけられました。カオダイ聖会の組織は、一番上で最高指導権を掌握し、教主的位置にたつ「教宗」。

次の位置に「掌法」。三教の法律の執行権をもち、三人任命されます。

第三位には、「頭師」が三人。三教教理のもとに、政治の権のみをもちます。

第四位に、「正配師」三人。政治と法律を握り、信者の生活を指導します。

第五位に、「配師」三十六名。各専門に専念して信者の生活のために尽くします。各派十二人です。

第六位は、「教師」七十二人。各派二十四人です。おのおのひとつの地域を監督します。

第七位は、「教友」三千人。各派千人で、地方の一つの教会を監理します。

第八位は、「礼生」で、人数は無数です。地方一郡の指導者になります。礼生の位は、聖会の範囲に入れていませんが、準位ということになります。

この聖会全部の職員が一体となって、カオダイの神の聖体となるのです。

玉皇上帝、すなわち太極聖皇または天の祖神の事業は、信者を教育し、世の中の改善をはかり、衆生救済のために世界平和を確保し、宇宙光明乾坤清浄三千世界の秩序を回復することです。この三度目の世界救済

のためには、信徒が自らの心身を浄化し聖体としてゆくことになります。

このように、神にいかされ、神そのものともいえる組織的な聖体が成立していったわけですから、さらに肉体を持った神が降誕することは必要ありませんでした。

その時、仏教の五枝大道（宗派）である明師、明善、明理、明堂、明新は、カオダイに改宗し一度に七千人が入信し、その經典をカオダイ教に奉納しました。儀式と礼楽は、儒教の伝統的な民族儀式を採用しました。

法律として、カオダイ教の神諭から成る「法正伝」と名づけられたものがあります。これは千年経といい、不変永遠に守る法律です。

この「法正伝」とともに、「新律」と呼ばれるものがあります。これは、衆生によつて作られた戒律です。これは万代不変ではなく、時代や社会の程度に応じて、人々の生活の幸福のために改正、改変されてゆくものです。

カオダイ教の発展

カオダイ教は、開教後の一ヵ年間で、信者数五万というおどろくべき発展を遂げました。それは歴史的な出来事でした。

博愛、公平、天人協一、万教同根、千宗一理、人類大同、万靈生衆みな神の子にして平等無階級：このような神の教をもつて、大道三期普度というカオダイ聖会が成立していったことは、人間の力だけではなく、権威ある神の経緯であることが明らかでした。

丙寅年（一九二六年）の旧十月十五日、立教式はタイニン県の慈林寺において、最大の祭典として開かれました。

このカオダイ教誕生の祭典日は、ベトナム民族だけではなく、二十世紀の人類に対しても重大な日であったと思います。世界の新たな精神文化の起点にもなり、世界平和と人類の幸福をもたらす確実な根拠となり、人類滅亡への道を遠く追い避けることができたのでした。

祭壇には、カオダイ神のシンボルである天眼が表現され、その前で白衣でカオダイ信徒が礼拝します。ベトナム人のみでなく、カンボジア人、タムン人（少数民族）、それにフランス人、中国人もいました。

来賓にはコーキシナ政府代表や、外交官、各宗教の代表、フランスや英國の神靈學関係の代表などでした。

報道機関も、サイゴン日々新聞、公論日報などの国内紙をはじめ、国際的にもフランスのパリマツツ紙に、その様子が「コーキシナに世界教説のカオダイ教」「極東フランス植民地コーキシナにカオダイ新宗教」「越南民族宗教の誕生」など、大見出しで掲載され、世界に光を投じていったのでした。

立教開会式は三日間で終了の予定でしたが、三ヶ月に延ばされ、それでも足りないほどの賑わいでした。コーキシナ全域の各省各县からの参拝者や入信者で毎日いつぱいとなり、期間が延長されていったのです。交通の便が悪かった時代ですが、水路を利用し舟で参拝する人が多く、それも五十隻、百隻で団体参拝するグループもあり、ヴムコドン河はそんな舟でいっぱいになりました。

礼拝場には、ベトナム人だけではありません。フランス人、カンボジア人、チャム族、タムン族、それに中国人も多くいました。

このようなカオダイ教の発展は、信仰運動での発展だったのでですが、あまりの勢いに、ベトナムの国民的

復活運動と受け取られそうな気配でした。

またタイニン省の郵便局長ラタビ氏は、フランス人でしたが、カオダイ教の教師となり、カオダイの制服を着て、礼拝の壇で挨拶をしたのです。カオダイ教はベトナムの民族宗教でありつつ、立教の当初から世界宗教としても成立していたと言えましょう。それはカオダイという新しい信仰の特色でした。国境を越えたカンボジアからも、カンボンチャム省、ツワイリエン省、マイモトからと、五千人ほどの入信者がありました。

このような勢いに、フランス植民地政府は心配はじめました。教団活動そのものを禁じることはできませんので、カンボジア人への宣教禁止令を出したり、中部北部越南フランス保護国のバオダイ（保大）国王に対し、カオダイ教伝教師がその土地に入るなどを禁止する法令をだすようにと強要したりしました。（一九二七年六月十日の勅令六号）

しかし、フランス植民地政府のあらゆる手段による妨害も、カオダイ教の発展を妨げることはできませんでした。

同年八月、フランス保護国であるカンボジアの首都

プノンペンにカオダイ教國際伝教教会が成立し、大聖堂（崇拝堂）も建設され、カンボジア人信者も四万を数えました。

一九二八年には、中部ベトナム、ユエ王宮、南部七省で、カオダイ信者は六万人にのぼりました。北部ベトナムでも、フランス人信者により、ハノイ首府と大都市ハイホンにも教勢は広がり、八百人の信者と礼拝堂、カオダイの事務所が建立されました。

このようにして、各自の自覚と自發的な信仰的熱意で、カオダイ教のもとに多くの人々が集まってきたことの中には、なにか歴史的な転換力がそこに働いていたと思われます。

カオダイ教の正式信者になるには、かならず入門式を行い、教えと律法を守ることを誓います。そして洗礼を受け、氏名を信徒名簿に登録し、信徒証明書を貰つて、はじめて正式のカオダイ信者となります。このカオダイの信徒証明は、カオダイ教組織にはもちろん、当時の社会政権にも、絶対の信頼をもつて通用しました。その証明によつて、信教の自由が保護され、信仰生活や宗教活動が応援されたのです。またそれは、そら信徒の行動を、カオダイ聖会が社会的にも責任を

持つということを意味しました。

このように、カオダイの教団組織は、まったく新しい宗教団体の組織でした。ガッチャリと構成されたカオダイの組織体制に、フランス植民地政府は、ますます疑いをもつようになつたのです。それまでのベトナム社会には、こんなことはまったくなく、初めてのことだつたからです。

一九二七年末までに、インドシナ全域（ベトナム、カンボジア、ラオス三国）にカオダイ教が広がりました。五百世帯の信者がでると、その地域に聖堂が建築され、カオダイ本部から教司という役職者が派遣され地域を指導し、宗教行政の流れをつくり、中央聖会とつながる体制が確立してゆきました。

地域では自発的な信仰活動が行われ、信徒の共同生活も営まれ、共産主義の実現のようにもみられたものでした。

このカオダイという新宗教の特色は、偏狭な宗派性がないということでした。仏教の五派である明師、明理、明善、明堂、明新は、みなカオダイ教に帰依し、そのお寺はカオダイの聖堂と静室（梵業瞑想所）に改造されてゆきました。各地の二十六寺社がカオダイの宗

教施設となり、仏教からも三万人を越える人がカオダイに改信したのです。

この五つの仏教宗派は、中国の清朝のころから越南に入ってきたものでした。そうして高台の御經は、神ばかりのまゝに、ほとんど明理派から採用されたものです。毎日奏上するその教典は、中国の紅卍字会の教典とも類似し、神の世界では紅卍字会とも深い関係があつたようです。

他に反清復明を唱える天地会という中国人の団体も、大多数の会員がカオダイの信者になつたのでした。事件ともいえるこのような動きの中で、カオダイの人気は圧倒的なものとなり、ベトナム民衆の中に信仰的な統一運動の風潮がたかまつてきました。フランス植民地政府は、統治政治が動揺することを心配になり、第一次カオダイ教弾圧を始めたのです。一九三〇年十二月に、第一次カオダイ教弾圧事件があつたのも、そのような理由からでした。

第一次事件のあつた一九三〇年までには、カオダイ教の信者は百二十万を数え、ベトナム人口一千五百万の二十分の一にもなりました。知識人から農民と、信徒の層も多様で厚く、各地のカオダイ信徒を指導する

タニン聖地の聖会本部には、各部門の機関施設が集中し、教職員は八百人余が勤めていました。

しかし、最高指導権を握る教宗（法皇）が聖地にないという難点もありました。というのは、カオダイ教の初代教宗にゴパンチュ（吾文昭）が任命されました。が、フランス統治政府下の役職名であるトリフ（知府）の位のままでしたし、フランス政権の圧力もあって「教宗」の役職を辞することになったのです。

一九三〇年十一月二十二日に李太白大仙人からお筆先による神示があり、上頭師（教職）上忠日（黎文忠元代議士の聖名）に兼職教宗が指示されました。このような人事にもうかがえますように、カオダイ教の最高指導権は、常に天界にあり、お筆先で隨時指示され、通信が続けられるのでした。

一九三三年一月五日の靈界通信では、八年ほど前にこの世を去ったレーニンの靈がお筆先に現れました。その中でレーニンは、カオダイ聖会への挨拶、将来祖国ロシアにカオダイから来てくれるようとの、招待の言葉でした。

当時、レーニンの靈の出現に、半信半疑の人もいました。「将来、ソ連の名前が世界地図の上から消され

ます」というような、當時では信じられないことも出ていたからでした。（つづく）

カオダイ教の歴史（四）

グエン・ゴク・ホア

第一次カオダイ弾圧事件（一九三〇年）

カオダイ教はベトナム国民に広く受け入れられ、一九三四年六月には、高名な尼僧・イユミン（妙明）の改宗なども、新聞紙上で大きく取り上げられました。一九五〇年ですから、後の話になりますが、バオダイ王（保大王・阮王朝の最後の皇帝）の母上である親皇后・ツユウ（慈愈）皇太后もカオダイ教に入信し、配師の地位になるなど、広く支持されたのです。仏教側からの抵抗もありませんでした。カオダイ教の全国的な広がりに対し、仏教の中心地である古都・エエ修行の仏教新聞・慈悲音々紙でも、カオダイへの異論が掲載されることはありませんでした。カオダイ教への帰依者や支持者の増加は、フランス植民地政府にとつては、脅威的なものとして映つたようです。

例えば、ベトナムのクリスチヤンは、カオダイ教第一次弾圧事件の一九三〇年当時には、キリスト教伝来以来二百年をかけて六十万人でした。しかしカオダイ教には、立教四年という短期間で、その二倍の百二十万の信徒が集まっていたからです。祖国ベトナムへの人々の思いが、この数になつたのでしょうか、フランス植民地政府にすれば、その統治の基盤を揺るがせるものと、カオダイ教にたいして強い危惧の念を持つたのも無理ながらぬところでした。

当時ベトナムでは、独立をめざしての民族運動がいろいろな形で巻き起っていました。一九二七年には、グエンダイホック（阮大学）がハノイでベトナム国民党を結成し、一九三〇年には、ホーチミン（阮愛国）が中国の広州でベトナム青年革命同志会を創設し、やがてベトナム共産党も成立してゆきます。

フランス植民地政府は、このような民族主義運動に

は、容赦ない弾圧をしてゆきました。しかし植民地政府下の国民生活は、失業者も多く、賃金は低い上に租税も高く、労働者はストライキやデモも行ないました。フランス政府は、カオダイ教にそのような民族運動を支えるものがあると疑い、圧力をかけていったのです。

カオダイへの圧力は、当時日本に亡命していたカオンデ殿下とカオダイ教の関係も、大きな要素でした。さらに、タイニン省での新たな聖地建設も、フランス植民地政府を刺激することになりました。

立教した一九二六年、カオダイ教が依った慈林寺に

フランス政府の圧力があり、一九二七年三月、カオダイ教はロンタン（竜城）村に九十八ヘクタールの原始林を購入、開拓を行ない、新しい聖地を造つていったのです。

縦横に道を開き、礼拝堂を建て、発電設備や印刷機も購入されました。道路は、平楊道、上和道、ツンタピタン路、威靈仙路、福德衝路などで、礼拝修道の施設は、苦台屋、龍女殿、觀音閣、金剛洞、極樂寺などです。カナ湖、西域池、八卦池、バーデン靈山など、今では国の名勝となつた美しい自然も整備していくつた

のです。

一九二九年ころから、混乱する国内事情の災難を避けるために、コーキシナ各地から信徒達がタイニンの聖地に引っ越しました。その数も千戸ほどにもなり、にぎやかさを増し、市場、学校、病院、孤児院、養老院なども設置されてゆきました。聖地に定住した信徒たちは、宗教的な雰囲気のなかで、平穏な生活を楽しんだのです。

しかし、フランス植民地政府にしてみれば、カオダイ教の新基地ができ、そこで「国家内国家」が形成されたという印象でした。

当時フランス政府は、フランス留学中のベトナム学生が、ベトナム独立運動のデモなどに参加すると、強制帰国させていました。カオダイ教の指導者層には、フランス政府の官吏役人が多く、その子息にはフランス留学生が多かつたのですが、フランス政府は、カオダイ教本部との連絡を断たないと、フランス政府は奨学金も出さないし、ベトナムからの送金も許可しない等等、陰険な圧力をかけたのです。

カオダイ神の最初の弟子であったゴバンチュウ（吳文昭）も、長男がフランス留学中でした。吳（ゴ）は

カオダイ教の最高位であるク教宗クの位を辞し、フランス植民地政権の府知事の位のままに、カントー（勤書）省にひきこもり、カオダイ照明派として、タイニンの本部へは、昇天するまで戻ることはありませんでした。

グエンゴクツォン（阮玉相）上正配師も、フランス留学中の一人の息子があり、結局ベントレ（竹江岸）省の故郷アンホイ（安会）村に帰つて、カオダイ教製道班派という新派を設立し、カオダイ総本山との関係を断つてゆくことになりました。

カオクンクー（高瓊居）にもフランスに留学中の息子がありました。しかし彼は、フランスの圧力に屈せず、カオダイ総本山と離れませんでした。そのために、留学中の一人息子に仕送りができなくなり、息子のアン（安）は、本国に送還される船の中で餓死したのです。一九二八年のことでした。

一連の第一次カオダイ教弾圧の頂点は、一九三〇年の末ころにやつてきました。

共産勢力は、ベントレ省、ミト省、サデク省などで村役員の殺害など行なうなど、暴力的な活動を行なっていましたが、その際、カオダイ教信徒だと偽称する

こともありました。その結果、カオダイ信徒への弾圧が激しくなったのです。フランス政権は、陸軍・空軍を出動させ、共産勢力が動き、同時にカオダイ信徒の多い地方に、飛行機での爆撃などを行なつたのです。二千三百六十六名の生命が奪われ、二万人近くが負傷しました。多くのカオダイ教徒が犠牲となりました。キンソン（金山）村では、朝市に集まる村人を飛行機が爆撃し、四十三名の即死者、一百名以上の負傷者をだし、その負傷者も病院に入れられず、つぎつぎに死者が増えたこともありました。

ミト省カイライ郡でも、残酷な事件がありました。「私はカオダイ信者、共産と一緒に独立運動をした罪」と書いた札を掛けられました。役人は、その「罪状」を捕縛したカオダイ信徒に口で云わせ、船の上で打ち殺し、河に流したのでした。信者の住んでいた村では、カオダイの御神体を見つけたら、その家人も殺していました。難を先に知つて、御神体をはがして竹の空洞にいれて隠し、またひそかに礼拝する信者も多かつたようです。

フランス政権のカオダイ教弾圧分断政策によつて、

この第一次弾圧事件の時、カオダイ教に六つの分枝ができてゆきました。次の六つでした。

①絶穀派……指導者は、グエンゴクデン（阮玉田）とゴヅクニユン（吳德潤）。タイニン省ロンタン村に中央静舎を設立。

②先天派……教友ツンチンタン（上九青）が、故郷ミト省カイベ郡フォクミタイ（福美西）村で静庵設立。後にレキムティイ（黎金巳）とグエンヴァントン（阮文松）も参加。特別のお筆先を使って、チャウドク（周督）省に弥勒宝座を建設。

③照明派……ゴバンチュウ（吳文昭）の指導で、カントー市に小庵を建てる。

④製道班派……グエンゴクツォン（阮玉相）上配師とレバトラン（黎百莊）玉正配師が指導。ベントレ省アンホイ村に聖室を設立。

⑤明真理派……グエンヴァンカ（阮文歌）太配師が指導。ミト省ミト市で聖堂を建設。中央静室とする。

⑥明眞道派……トランダオクアン（陳道光）玉堂法、カオチウファオト（高兆發）配師の指導。バクリウ（泊寮）省フオクロン（福隆）郡で聖座を建立。

以上の六派に集う信徒数は、みなで三十万人。その

うち、製道班派に二十万人が集まっていました。タイニン省の本部には百万近くの信徒が残りましたが、カオダイを指導する幹部の半数近くが、各派に分散されることになったのでした。

それにしても、キリスト教国であるフランスの植民地政府が、罪のない人々を無差別に虐殺したり、関係のない子供まで殺すことを、キリスト教の神は許されるであろうか。カオダイ教を弾圧したフランスのクリスチヤン官吏たちが、本当に信仰を持っていたのか…、そのようなことは世間の議論に譲りますが、考えさせられるところです。

第二次弾圧事件（一九三二～三六）

フランス植民地政府は、カオダイ教の発展を封じるために、弾圧へのいろんな機会や口実を搜していました。

信教の自由を公然と犯すことはできないことから、弾圧には、カオダイの活動に反政府的、政治的な動きがあるとの理由づけが行なわれてきました。

カオダイ教總本山の正門に、次のような二つの対句が掲げられています。

「高上至尊大道和平民主目」

「台前崇拜三期共享自由權」

ここに見られる（平和）（民主）（自由）などの字句は、当時のベトナム民族解放の政治的主張と一見通いあうもので、その活動に協調しているかの印象を与えることになりました。

第一次事件で分枝させられたカオダイの六派や総本山から離れた教職員や信徒は、この総本部三閥門の対句は使わなくなり、（博愛・公平）（大道三期普度）などの（新法）の御教えを用いらず、（旧法）にもどって純粹に修行する（）と、カオダイの本筋から離れるようになつてゆきました。

それだけでなく、フランス植民地政権の手先になる分枝もでてきたのです。ベントレ省の製造班派のグエンゴクツォン（阮玉相）は、カオダイ教総本部批判を始め、（カオダイ総本部のレバンチュン（黎文忠））権教宗とファムコンタク（梵公則）護法は、反仏運動をしている（）と、フランス当局に訴えていました。フランス植民地政府は、このようにカオダイ教を内部から崩壊させようとしたのでした。

そのことは、カオダイ教を弾圧したフランス植民地政権が、結果的には退却し、カオダイ教が勝利してきた歴史で実証されることでしょう。植民地政権は、カオダイ教の不動の精神的な基礎におそれをなしたのだと思います。

神からの不屈永遠なる生命を保ち、祖国ベトナムの独立・民主・自由の回復、社会公平と世界平和に向かっての永続する宗教的な姿勢を、カオダイ教が基礎的に確立している。このことを、フランス植民地政権が察知していたからこそ、激しく執拗に弾圧したのだと思

る意味をもつっていたのでしょうか。

タイニン総本部のカオダイ教中央礼拝堂には、（仁）（義）の二つの字が大きく書かれています。孔子の教えを内面的に高めつつ、国家社会への人間としての愛と義務を示したもので、また礼拝堂の表の壁には、（博愛）（公平）の文字が、神と人間との間の第三和平条約として示されています。それは老子の道德経にある「不戦而善勝」や、イエス・キリストの「汝の敵を愛せよ」の聖言と通いあう宗教的な世界なのです。

います。

第一次弾圧の結果は、フランス植民地政権への各方面からの批判となり、皮肉なことに、カオダイ教発展への大きなステップとなりました。しかし、それで反省する植民地政権ではありません。二回目のカオダイ弾圧は、もっと計画的で大規模に行なわれました。

カンボジアでのカオダイ教の発展は、前にも触れましたが、一九二七年五月、首都プノンペンに国外伝教機関本部が設置され、信者数も三万六千人を数えました。その半数はカンボジア人であり、半数は越僑や華僑でした。総本部からはカオヅクトロン（高徳仲）保道など数名が派遣され、カオダイ信者でない僧侶たちも礼拝するなど、日々隆盛に向かっていました。

フランス植民地政権は、このようなカオダイ教の宗教活動を押さえようと、諸法令をひきだし、仏教とキリスト教をのぞく他の宗教の宣教や祭礼などを一切禁じる施策を打ち出してきました。そして一九三〇年の秋季大祭のときは、カンボジアの憲兵を出動させ、司祭や信徒を投獄し、裁判で総額百万仏フランという高額な罰金刑を押しつけてきました。

カオダイ教側はフランス政府の最高裁判所まで抗告

し、フランス本国でも議論が高まりました。植民地政権の宗教弾圧政策を批判する論者も多く、一九三二年一月末に、最高法廷で無罪判決がだされ、カオダイ教はこの訴訟に勝つことができました。

フランス植民地政権は、このように完全に失敗したのです。

しかし、ベトナム国内では、もっと狡猾な手段でカオダイの弾圧を計ってきたのです。

先にも少し触れましたが、総本部から分かれた製造班派の指導者・グエンゴクソン（阮玉相）は、最高指導者の地位たる教主の席を狙い、フランス植民地政権に接近してゆきました。そして政権への忠実さを証明するために、総本部の権教宗・レバンチュン（黎文忠）とファムコンタク（梵公則）護法を、反政府暴動を準備中であると密告したのです。

一九三四年一月、タイニン省の警察や地方保安兵が、カオダイ総本山に出動しました。カオダイ教側は最初は侵入を阻止したのですが、弁理局の捜査令状の提示もなされ、聖地の調査が始まりました。しかし半日かかるとも、武器というようなものはなにも見つからない。炊事場近くに掘られていた数カ所のゴミ捨て用の

穴を斬りと疑う位なもので、反政府暴動をでつちあげる証拠はなにもなく、皮肉な結果に終わりました。

それから一週間後の二月十八日、タイニン省の警察から罰金支払いが要求されました。二人の信者の人頭税未支払いや、牛車の夜間無灯火への罰金だというのです。その結果、権教宗・レバンチュン（黎文忠）が

投獄されたのです。

レバンチュン投獄を聞いたカオダイ学校の生徒や教師達は、五百名にのぼるデモ隊を組織して宗教弾圧政策を批判し、教宗の釈放を要求し、省長官邸までデモを行ない、気勢をあげたのでした。驚いた省長はデモ隊代表団と会見し、教宗の釈放は二十四時間以内で実施されました。

教宗・レバンチュンは、元コーセンダ代議士であり、フランス政府から北斗珮星章という勲章を貰つていました。温厚な形での抗議ですが、レバンチュンは、投獄された翌日、この勲章をフランス政府に返還することにしたのです。「貴国フランスの高貴なる勲章を受ける資格なきものと思い、この勲章の価値をまもるために、返納します」という理由がつけられました。

植民地政権は驚き、タイニン省の省長本人がレバン

チュンのもとを訪ね詫びたのですが、結局この省長は本国に呼び戻されることになったのです。

ここでも、フランス植民地政権は、カオダイ教弾圧をしくじり、敗北の恥辱を味わつたといえましょう。

レバンチュンは、その後間もなく、一九三四年十一月十九日に昇天しました。

盛大な葬儀で、各地から五十万人にのぼる信徒が参拝しました。中国、カンボジア、ラオス、タイ、フランスなど各国からの参列とともに、ベトナムの少数民族が山中から三千人以上も集まり、レバンチュンの葬祭に参列しました。カオダイ教の勢力は、深くこまやかに浸透していたのです。

フランス植民地政権は、レバンチュンの死去を、カオダイ教の力が弱まるものと歓迎しましたが、そうはゆきませんでした。カオダイ教は、大幅な組織改変を行ない、新事態に備えて行つたのです。

翌年一九三五年一月九日から一週間にわたって行なったカオダイ教第二回総代大会では、ファムコンタク謹法に一切の最高権を集中させることが決議されました。

それまでは、カオダイ組織は一つにわけて運営され

ていました。教団宣教行政部門である「九重台」と、教をまもる司法部門である「協天台」と、互いに無干渉で運営されていたのです。しかし、困難な時局に處するため、両部門を統一的に運営する「教主」の地位を設け、それにファンコンタクが推されたのでした。ファンコンタクは、新法制定の一年後、一九三六年一月十六日に教主に就任し、難局にあたつて行くこととなりました。

フランス植民地政権の妨害は続きました。

トランバン県に新築された聖室（寺）の完成式をめぐって問題が起きました。その祭典については、日本をフランス政権当局に事前に通知してあつたのですが、コーチシナの総督パゼスは、三日前になつてその祭典の禁止を指令したのです。
すでに祭典執行の連絡は為されており、各地の信徒すべてに祭典中止を伝えるには時間もありません。祭典には南ベトナム全域から、団体を含めての参拝者が、その数二、三万と予測されていました。当局は警察、保安兵を三百名ほども動員し、参拝者を実力行使で蹴散らす算段でした。最後は虐殺も辞さないとの姿勢です。

カオダイ教側は、困難な状況に追い込まれました。信者や参拝者にお詫びし、帰らせるようなことになれば、せっかく組織も堅固になつてこれからという時に、カオダイ教の指導者の威信も問われるというものです。教職員は頭を抱えましたが、ファンコンタク教主は、見事に事態を切り開いていったのです。

とまどう信徒には、教主は次のように声明しました。

「カオダイ教は神の道です。消滅させたいと思つても出来るものではありません。もし消滅できるのならば、創立初期の段階で無くなつていただけます。そうなれば、神もいないことになります。しかし、カオダイの神の約束した救済の道は、絶対に間違いのないものです。貧道（教主の自称）は、これまで何度もそれを証ししてきました。今回の警察や軍の動きは、聖室の完成祭に尊厳と彩りを添えるものとなるでしょう」

と、温和ななかにも、決然とした意志を示したのです。

一方、禁止を命じてきたパゼス総督には、「信徒たちの信教の自由に逆らうことは無理ですが、祭典当日の秩序安全は保証します。ファンコンタク教主 押印」との文書を提出し、他方、弁護士・チンディエンタオ（鄭

廷草) を呼んで、フランス本国政府に直接に今回の事情を報告し、本国政府の意見を尋ねるように指示したのです。

フランス本国の植民地省のジョッジ・マンデル担当相は、この電報に驚きました。信教の自由を犯すこのようなやり方にマンデルは反対で、「カオダイ教のトランバン寺の落成式は、自由に行なつていい。もし異常なことがあれば、すぐに連絡を」との返事の電報を、チン弁護士に送信しました。マンデルは同時に植民地政権にもその旨を連絡したようで、結局バゼス総督は弾圧命令を出すことはできなかつたのです。

警察や兵は銃口を向けてはいましたが、数万の参拝信徒は、新築の聖堂に、穏やかに、滝のように流れ込んで行つたのです。

このような事件を通して、カオダイ教の威信は広がつてゆきました。独立闘争の指導者達も、暴風雨を避けるようにカオダイ教教会を訪れました。一九七五年、ベトナムが独立統一された時、共産党中央委員が「カオダイ教はベトナム革命のゆり籠」と評価し、解放線の某公安大佐も「カオダイ教は大樹の涼しい蔭」と語つたのも、故ないことではありませんでした。

またもカオダイ教弾圧計画に失敗したフランス植民地政権は、さらに次の手を打つてきました。

それは、カオダイ教を反政府団体とする、その証拠の文書を入手することでした。

一九三六年十月中旬、サイゴンのフランス軍事裁判所の密命で、フランスのゴッルドン大佐はカオダイ總本山の一斉捜査を構想計画しました。そのことを裁判所の仲間に次のように漏らしていたのです。

「今度は反動政治の組織を捜査することになり、押収証拠資料を運ぶトラックを十台ほど用意しなくてはならない。こつそりと兵隊を運ぶ二十台のトラックは準備済みだ」

それを聞いたゴッルドン大佐の親友は、「そのような大きな組織があるのですか。サイゴンのどこですか?」と尋ねると、根が正直な大佐は隠すこともできず、「カオダイ教だよ。早朝に出動し、合法的に明かるくなつてから突入する。押収した資料はサイゴンにもつて帰り、調べることにする。成功したら乾杯しよう」

偶然にその話が、隣にいたユオンヴァンジャオ(陽)と語つたのです。

(文教)弁護士の耳にはいったのです。カオダイ教親派の弁護士で、密談の内容がファムコンタク教主に急報されました。

教団本部にまで植民地政権が侵入し調査することは、従来考えられないことでした。ですから、海外亡命中のクオンデ殿下との秘密連絡文書など、レバナンチュン時代から、総本山に保管されていたのです。見つかつたら危ない文書ですから、大急ぎで調査焼却することになり、昼夜兼行、十八時間もかけて焼却し、その灰は教宗堂の裏手の井戸に捨て埋めたのでした。

朝になり、武器を携帯した兵隊と警察官がカオダイ教總本山の各機関に押し入り、御經なども含め、文書類をすべて押収し、トラックいっぱいにつんでゆきました。

やれやれ…と一安心するまもなく、教主書記のフイントンロイ（黄進利）は、東京からの密書が押収された文書の中に残っていたのを思い出したのです。見つかつたら、カオダイ教は解散させられ、教職員幹部はみな投獄必至の文書でした。

ファムコンタク教主は当時では大金の二百ドンを準備し、押収文書からの回収をトルオングツク（張有德）

に渡し、二十四時間後にはその回収に成功したのです。トルオングツクは、カオダイ教に入信する前は、中央警察署に法律検査官でしたので、昔の部下を買収して、山ほどの文書から、その密書を回収したのです。

フランス植民地政府とのやりとりは続きました。

（第二次弾圧事件の項、つづく）

大道三期普度

西寧聖座

高台教⁺

海外伝教機関

アピール

現在のこの第六十次の地球に等しく生命を受けた二十世紀の人類の友達全体に御届け

皆様！

宇宙の至上なる神がお見えになりました！

諸神諸佛の主であり、万物衆生治められる宇宙の至上の神が再びこの世に現されました

この 地球に住んでおられるすべての人々は皆等しく兄弟であります。私たちは 早く神様を敬迎して。この至上の神に、私達の過去、現在そしてまた将来にわたる罪をお赦しを願い致すものです、私達は何時も過を悔い改めることをかけております。この世の苦難から私達を救て下さるよ心から願つておるものですがけております。この世の苦難から私達を救て下さるよ心から願つておるものですがけております。この世の苦難から私達を救て下さるよ心から願つておるものですがけております。

この一万年の間において至上の大御神が三回現れました。

- 第一回目は モゼ ハムラビ、阿弥陀として

- 第二回目は、イエス、キリスト孔子、老子、釈迦牟尼として

そして此度第三回目また最後として至上の大御神は現れて前二回と同様に人間を救うため全人類の代表なる三大聖人：ビットルーユゴ阮炳謙と孫翼仙と言う神人協一条約を結びました永遠の平和の約束となり。それに依て人間は滅亡の危機より避ける事が得きました。今後とも私達は心配、不安はなくなりました。何故ならば私達は 次の三つのものを持ち得るよになたからです」

- 唯一至上の神の崇拜として

- 唯一の信心の信仰として

- 唯一の人間の人間愛として

これからこの世における宗教、民族、種族での差別と言うものではなくなり過去に見られた人間の暗黒な血だらけの歴史と云うものも無くなるでせお。そして私達は至上の大御神に御願い致したことと同じように、お互に、過去現在、のそしてまた将来の憎しみ恨みを總て赦し合い、永遠に人類愛を守て行くことを約束しなければなりません。

今後、私達は次の一二の言葉書かされる至上なる大御神の御名で称えませお

『南無高台仙翁大菩薩摩訶薩』

即ち私達の大慈大悲の父の御名です。

私達はこの御名を以て心合わせて罪を赦し人々が幸福で全世界に平和的平
隱など楽しく豊かな暮しが得るようにお祈り致しませお

私達はこれから何時でも大御神と約束したことは忘れてはなりませんのが
唯二条だけです、それは：

博愛と公平である

人類生存を保証するためにこの約束を覚えて尊重し、二一世紀に進出の
準備をしなければなりません。そこで人類は初めて恵まれる新し文明生活は至善至美
至眞の時代を迎えるのです。そして宇宙の他の衛星は七十万年先までの計画の下で私
達人類によって開拓されるのを待っているのです。何故ならば私達のこの第六十八次
の地球は既に第四の変換期に入りましたが宇宙生成歴史にはこの太陽系四五億六千万
年が経過しても他の衛星はまだ漸く第三の変換期に入るところです。

以上の理由で若し誰が此の条約に従うはなければ、まず神に反するばかり
でなく人類に対しても反するものであり人類の文明の前途を破壊するものであると云
うことを知らなければなりません。

人びとにとて罪や過ちを悔とり改らためるための時間は極めて少ないので
は、人類が赦し合い愛し合えないこととすれば公正なる神の最後の審判がなる時が
来ることになります。人類愛又将来の世代のことを考えるならば三期にわたり人類の
罪を赦されました大慈大悲の父なる至上の大御神からの最後の救いを得るために

『神人協一、博愛と公平』の条約を尊重しこれを守りませお。
至上なる大御神がここに最後として現われ給いた人類の生存の法則を明か
にお示し下さたことに感謝しませお。

これより私達すべては大御神との約束を果たし、生存の法則に背向かぬようには教を垂れあらゆる方法で努力を尽くすことが私達すべてにとって義務であることを覚えなければなりません。

以上はこの二十世紀において苦しみ悲しみ困難とともに忍んでいた友人として心からの呼びかけであります。

全世界高台教信者 より

高台教創立記念祭

六十九周年

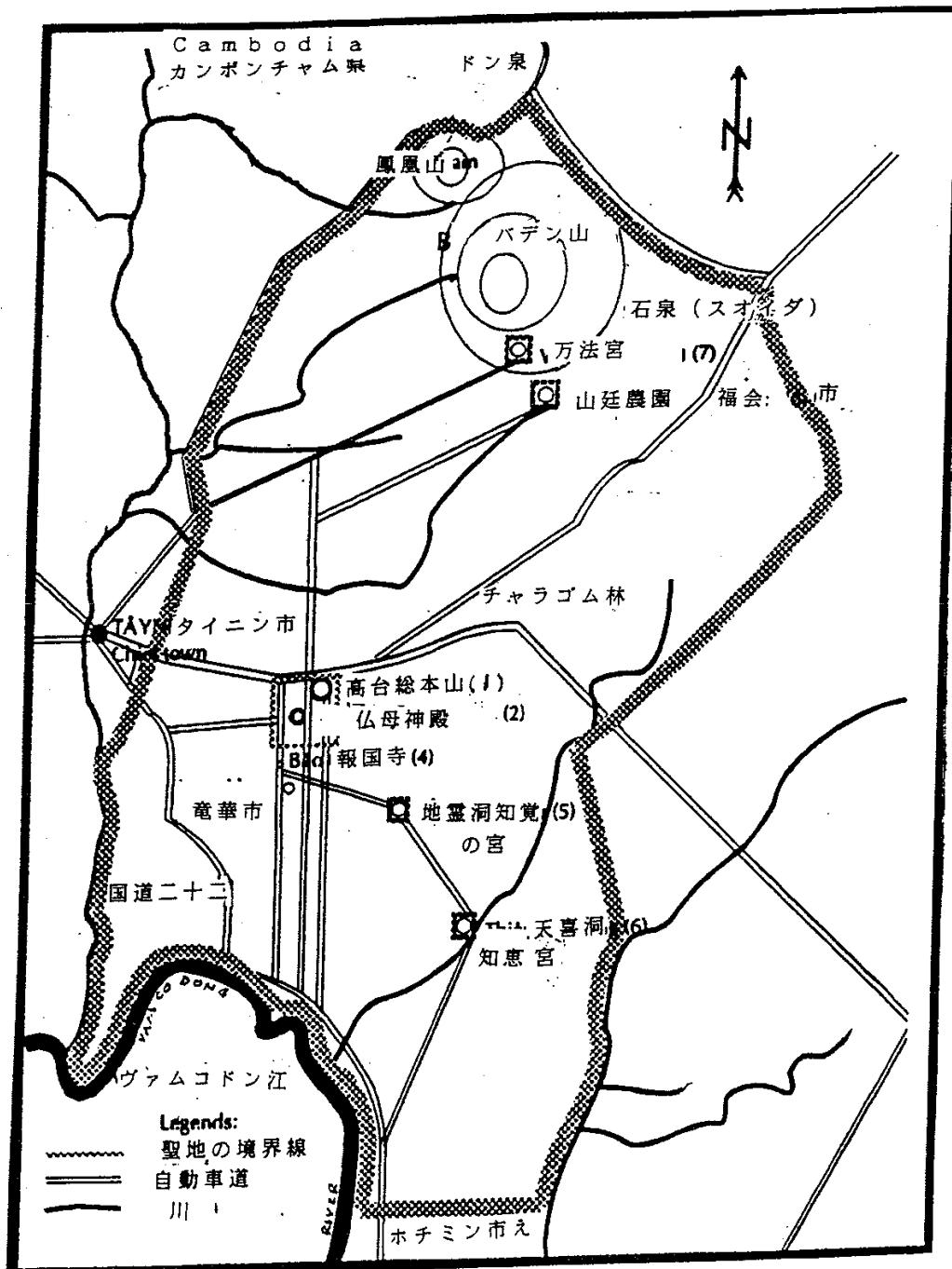
(1926-1995)

在日本高台聖会代表

礼生、太永淵青

(永淵一郎

西寧省にある高台教の聖地。四十キロ平方メトル略図
タイニン カオタイ



九重台

高台教の教化の機関、指導権は教宗（法王）のもとに置く組織は、釈老儒三教帰元と人道神道聖道仙道仏道五支を復一の宗旨目的の実施が大道三期普度の救済の方針、この機関のシンボルは、仏の瑜鉢、仙の払塵と聖の春秋經「宝法」とよばれています。



協天台

高台教の真伝法律を保守機関、指導権は護法のもとに置く、シンボルは福罪の秤、組織は三支、道、法、世即ち、仏法僧の原理を示す、釈、老、儒 三教の根本の定理を合わして人生の生活を順調に守るために組織した機関、ここで宗教裁判が行なう、高台教の特殊な宗教政策で科学的に進行し道徳を守る人間の精神の進化を推進する。

上生は、人生の最上権の代表、世支の主君、

信者の生活の安全と幸福な暮らしを守るため、悪業を除去するの目的で訴訟権の実力を行使する、

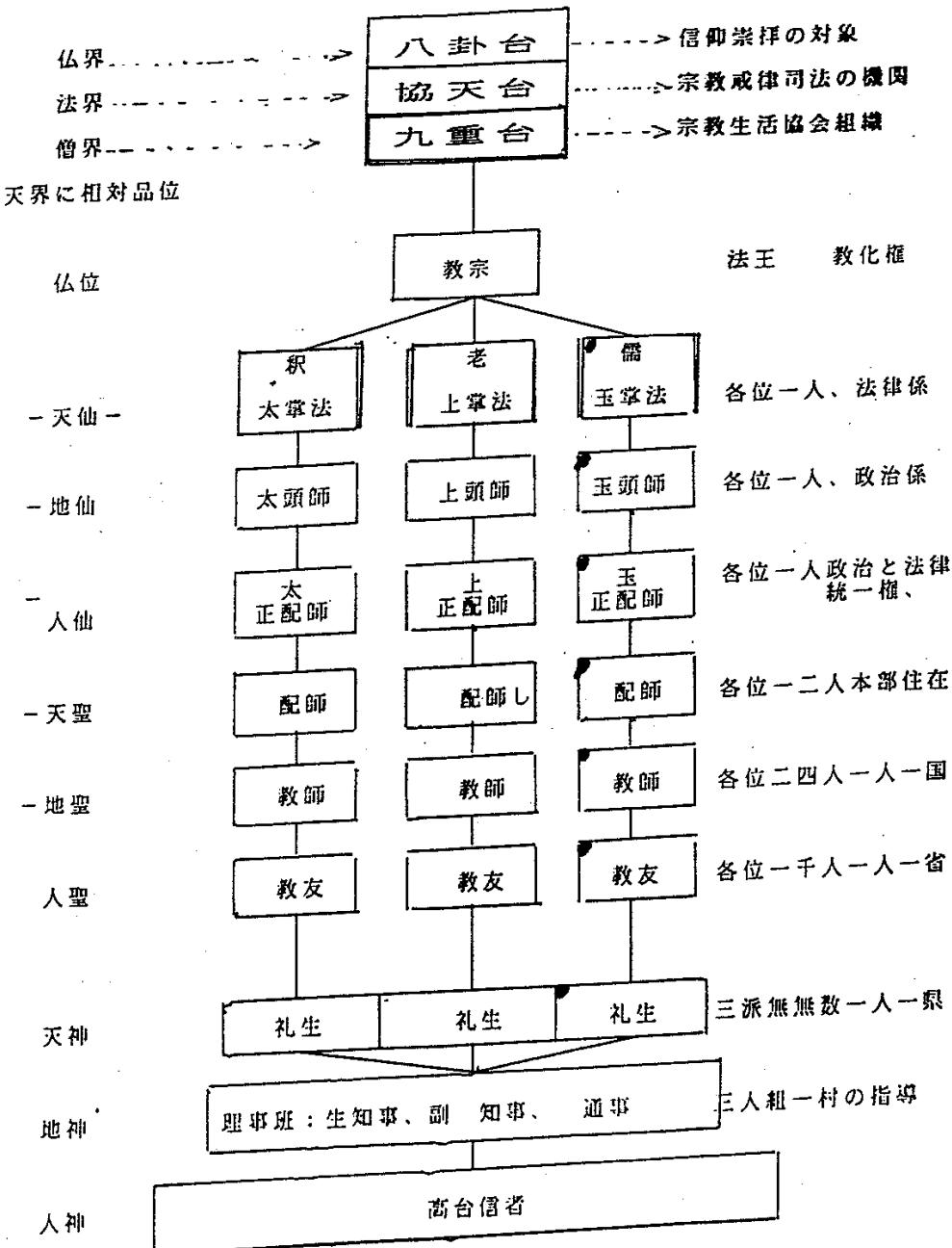
上品は、神仏の最高権の代表、道支の主宰、い

信者の精神の進化と品位を上昇するの目的で、弁護権の実勢の善施で神格を守るの方針、

護法は、神人の相刻を定め、神密の法則を握る、法支の主、物質と精神を調和して、道徳の観念が人間の生活を困らさないように、また逆に、生活が道徳の規律に犯さないように平常に保、物質と精神のみ矛盾を亡くす計るために罪福、正邪の弁別のが、儒老釈三教の基本の定理に基く公平的に処分する、正法を守る最高の勢力の実現する機所となる、

この組織は三支、世法道と成した仏法僧の原理と儒老釈三教表現の仕方によて、若し三支が一致すれば、公平と博愛の定義が成立する異議がなく、高台教の救世の目的を達成する方針と云う新しい解法でした。、

高台教の組織

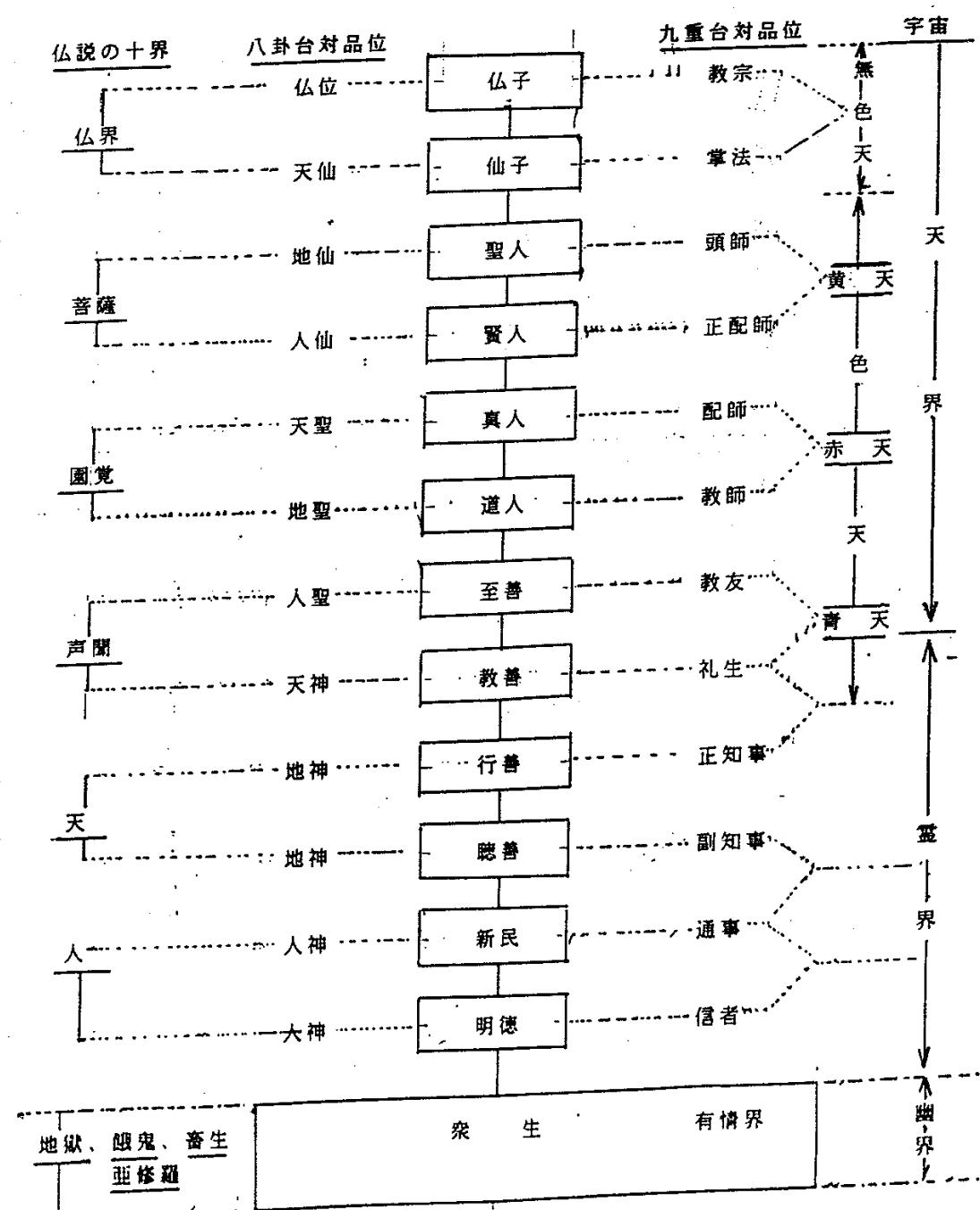


- ◆ 宇宙の主人翁は神、この衛星地球の主人翁は人
- ◆ 神と同様に生存不滅、幸福に暮せるために神人協一の原則を守るつもりである
- ◆ この組織は、一仏、三仙、三十六聖、七十二賢、三千弟子不増不減の定数である
- ◆ この人事は世界の良人を集めて聖人の公となる教団は聖会と命名した此の衛星に於ての神の体と成る宇宙の神の代わりに入類救済の働きを勤める為の高台教の組織した体制です。

高台教の組織

名副善聖会

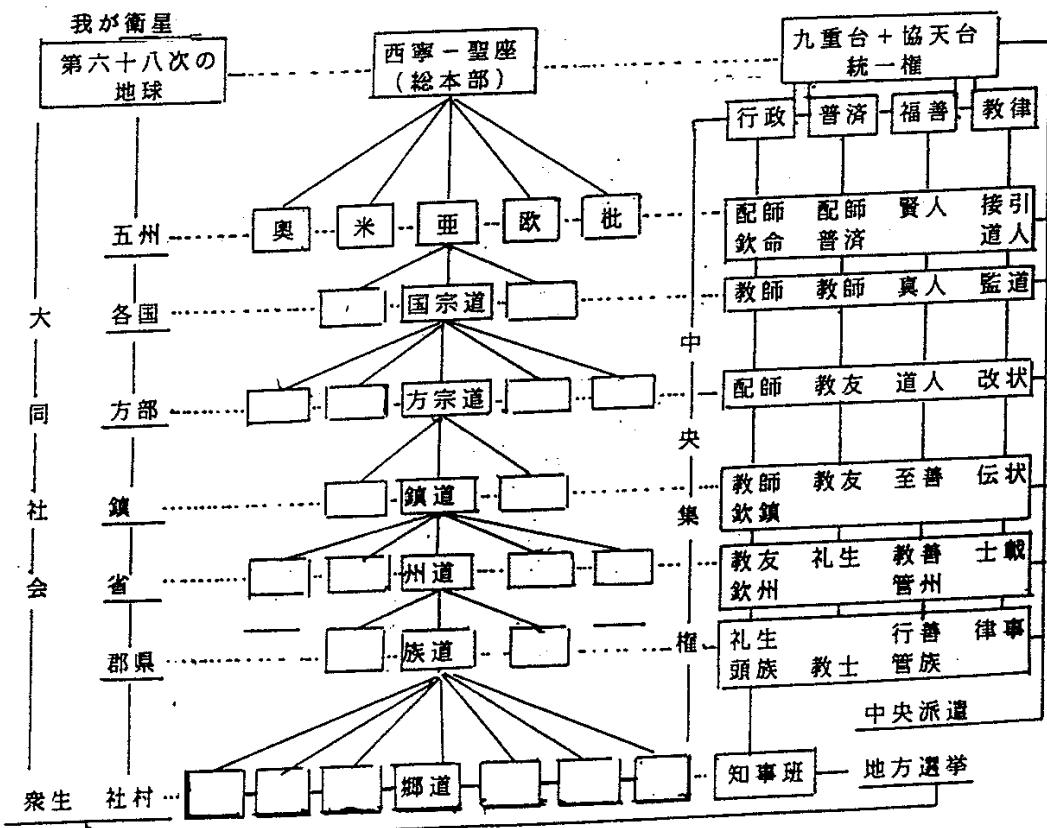
社会福祉活動の機關解苦の道を実施する、老弱、病疾不具孤独、患寡の
もの貧苦の人等の救済を備くその功績に依て教封する、



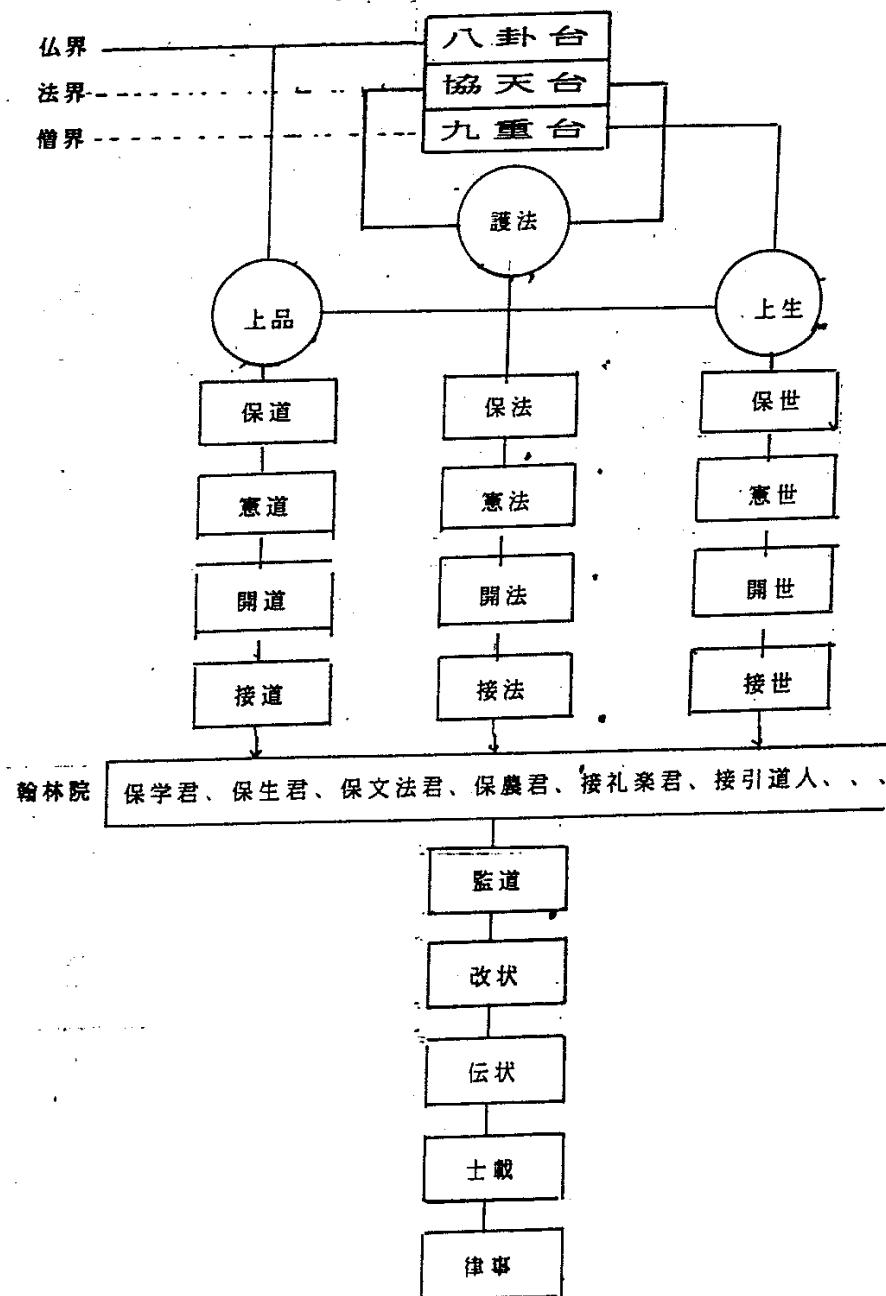
高台教の組織

新改革

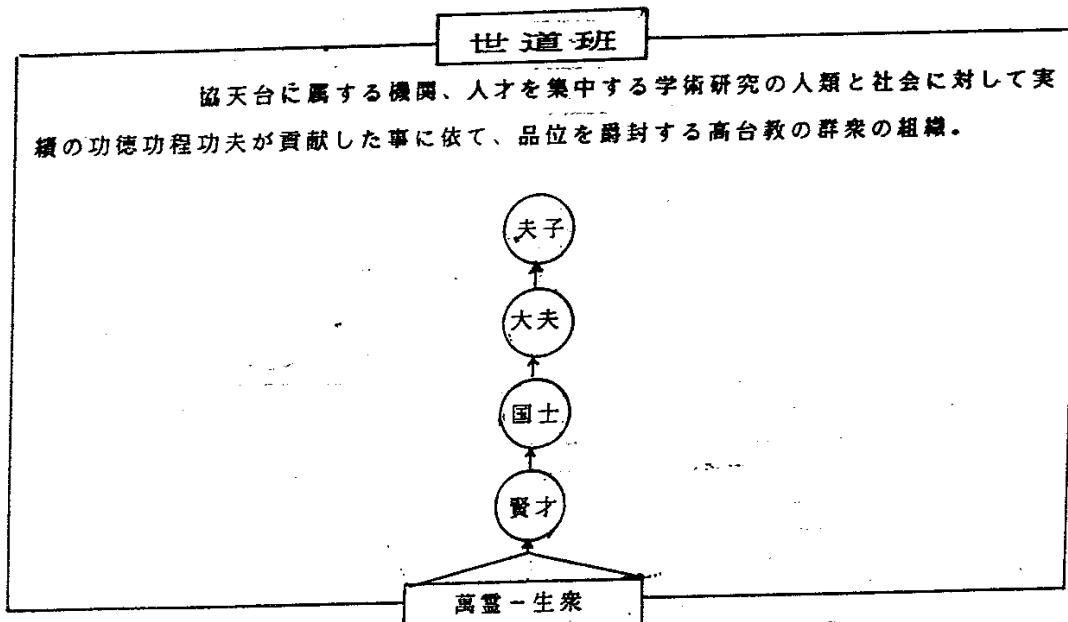
1935年世界の事情の変転を予想して人類救済の時期と合う様に高台教の活躍は機構組織が変更しなければ間に合うはない訳で高台教創立十週年一月九日から十五日迄の総代大会の決議案に寄て、九重台と協天台、両台の統一権は范公則保護法（教主輔）に認められた、それに依て法律は以前のそのままだが、行政だけは次の四つの機関が成立して相互の権限責任を持て新体制を構成した、一九重台に属する教化権は行政と普済、協天台に属する司法権は福善と教律。と云う四つの機関が平行に中央から地方迄新しい体制を施行するようになりました。



高台教の組織



高台教の組織

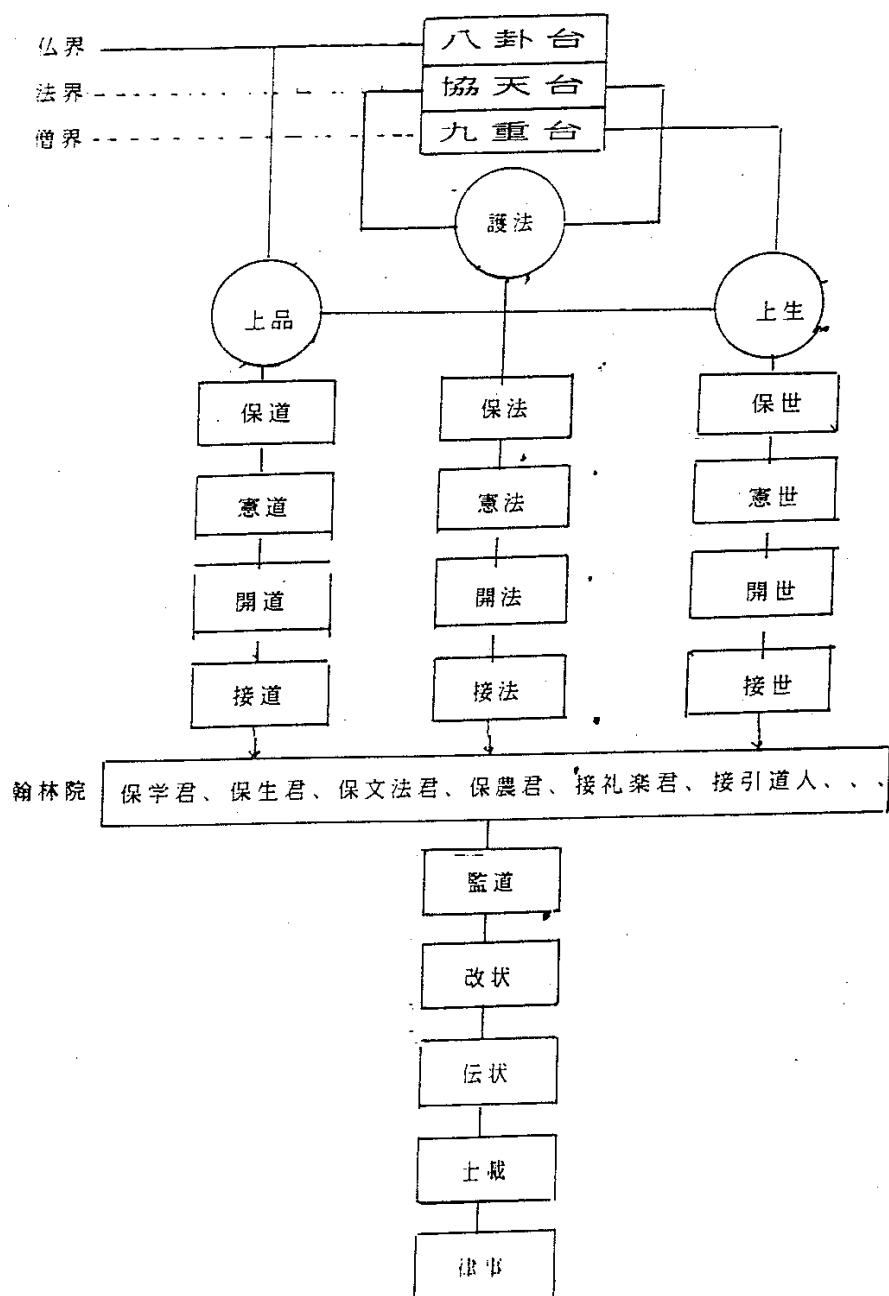


神の代わり聖体と命名した高台教は、神らしく公平的に世の中に行使しなければならない、から世道の機関は、
悪人と遠隔し、
善人と近親し、世のために学問研究藝術發明の工呈工夫を持て人間に貢献した人々に対して謝賞して激励するため
善を長して悪を滅ぼす組織です。

◆◆◆

- この各地位に付いて理解し安いために、次の様な見解がしています、
- 1 - 賢才と云う品位は、ユオンバンジャオ（陽文教）弁護師とトランバンゴオ（陳文悟）通信工学技師が1932年に封せられた、日本の場合でしたら、長谷川博士あたりでしょ、
 - 2 - 國士はトランチエンチョン（陳善真）海軍提督（少将）1972年に封せられた日本の場合でしたら、乃木大将の様な人がらと見られます。
 - 3 - 大夫の位はまだ空位となっていますが、越南のファンボイチャウ（幡琲珠）がいましたが日本の場合としては、西郷と伊藤八文の様な人物にあたる。
 - 4 - 夫子 - とは偉大な思想を以て人世に代々に伝わる影響力が持つ人、印度のガンダ
- ぐらいの様な偉人に当たるでしょう、。

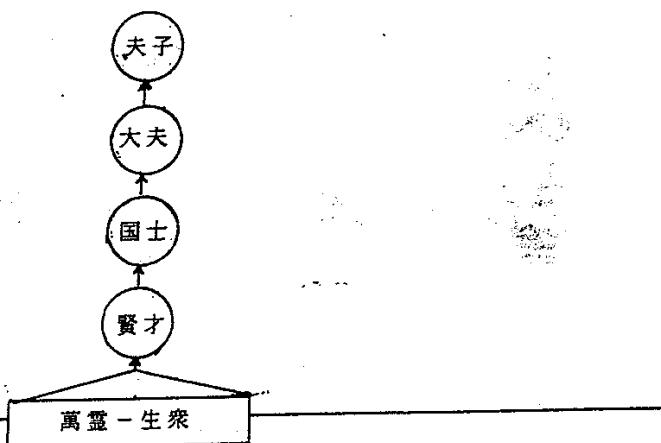
高台教の組織



高台教の組織

世道班

協天台に属する機関、人才を集中する学術研究の人類と社会に対して実績の功德功程功夫が貢献した事に依て、品位を爵封する高台教の群衆の組織。

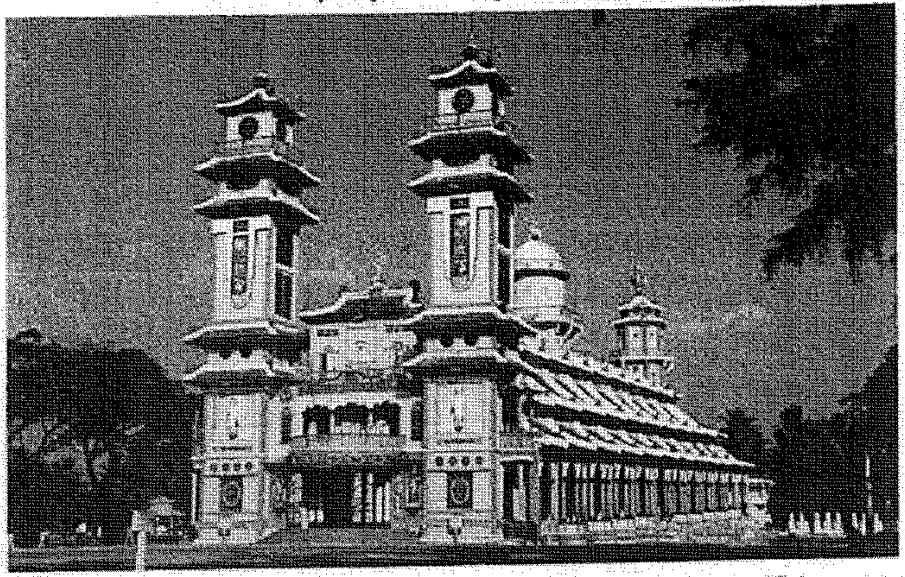


神の代わり聖体と命名した高台教は、神らしく公平的に世の中に行使しなければならない、から世道の機関は、
悪人と遠隔し、
善人と近親し、世のために学問研究藝術発明の工呈工夫を持て人類
に貢献した人々に対して謝賞して激励するため
善を長し惡を滅ぼす組織です。

＊＊＊

- この各地位に付いて理解し安いために、次の様な見解がしています、
- 1 - 賢才と云う品位は、ユオンバンジャオ（陽文教）弁護師とトランバンゴオ（陳文悟）通信工学技師が1932年に封せられた、日本の場合でしたら、長谷川博士あたりでしょ、
 - 2 - 国士はトランチエンチョン（陳善真）海軍提督（少将）1972年に封せられた日本の場合でしたら、乃木大将の様な人がらと見られます。
 - 3 - 大夫の位はまだ空位となっていますが、越南のファンボイチャウ（幡琲珠）がいましたが日本の場合としては、西郷と伊藤八文の様な人物にあたる。
 - 4 - 夫子ーとは偉大な思想を以て人世に代々に伝わる影響力が持つ人、印度のガンダ
- ぐらいの様な偉人に当たるでしょう、。

Dai Dao Tam Ky Pho Do



Tòa Thành Tây Ninh

高台教總本山

Dai Dao Tam Ky Pho Do

